
あざみ野

李孟鑑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あざみ野

【Nコード】

N9710M

【作者名】

李孟鑑

【あらすじ】

帝と対立し、離反をはかった皇太子・中大兄皇子。飛鳥へ向かった彼の傍らには、妹の間人皇后の姿があった。指弾も、誹謗も、そして近親相姦の穢れを負う限り皇位には就けないことも覚悟の上で、二人は手をたずさえ、共に生きた……。

中大兄皇子が晩年まで即位しなかったその背景には、実妹・間人皇女との禁忌の恋があった、という説に基づいて書いた作品です。

第一章 飛鳥還都（一）

かわべのかりみや
河辺行宮に、篝火が灯った。

宮内と共に庭のおちこちにも一斉に焚かれた火は行宮を力強く照らし、高い切妻屋根の鋭いへりまでもを、切り落としたように輝かせていた。

この行宮に、このように華やかに篝火が灯るのは、難波に都が遷都されて以来、実に八年振りのことであつた。森の深い葉ごもりの奥に、楽音の湧き上がるようにその夜明々と照らし出された行宮の姿は、あたかも長く眠っていた古い神が、突如その目を覚まして蘇つたかのように、飛鳥の民には思われた。

飛鳥への還都^{かんと}を果たした、その祝いの宴が行われているのだつた。群臣らは行宮の広間に集い、楽師の奏でる笛の音に乗って、笑いさざめく声はにぎやかに人々の間に沸き返つた。芳醇な香り漂う酒瓶を抱えて、女たちは裳裾を美しくひるがえしながら、男たちの盃から盃へと、蝶のように忙しく行き来した。酌をして回る女たちの間に少女が一人立ち交じっているのを見つけ、誰かが差し招いた。命ぜられるまま、少女は抱えていた瓶を置き、その場で舞い始めた。大和で舞われているものとは趣の異なる舞であつた。そのどこか野蠻な匂いのする舞は、少女の、幼さを残した愛らしい顔立ちと、胸のざわめくような調和を見せていた。困んだ男たちは手を叩き、褒美の盃を与えた。今一度舞うように求められて、少女は素直に立ち上がったが、慣れぬ酒に足がもつれ、白い脛^{はぎ}をあらわにして尻もちをついた。酒と恥ずかしさとに赤らんだ頬を手で覆い、少女はそのまま宴の広間から駆け去つた。逃げ去つていく背を、男たちの笑い声が追つた。

集うた群臣の中から一人が立ち上がった。酒を満たした盃を片手に高々とかかげ、上座に座った中大兄皇子と、皇子と並んで座す母君、皇祖母尊（すめおやのみこと）（1）のために、その長寿を願う歌を奉った。歌い収めると、別の臣が立ち上がり、今しがたの歌を受けて飛鳥の宮の栄を願う歌を奉った。また一人、そしてさらにまた一人と、臣たちは次々と立ち上がり、めでたき即興歌はいつ果てるとも知れず連々と歌い継がれた。

* * * *

やがて宴の夜は更けた。闇が濃さを増すにつれ、冷たい夜気が人々の間に降り、篝火の炎を静めた。歌がやみ、笑い声がやみ、楽音がやんだ。興奮は徐々に拭い去られ、そうして行宮に、闇と沈黙が満ちた。

宮が眠りに沈む中、中大兄は灯が絶えた回廊に、舟のように歩み出た。月影の下、静まり返った回廊の周りには生い茂った下草の葉がさわさわと鳴っていた。内庭は一面に、もはや何の茎葉も見分けられぬほどに草が入り乱れていた。ある一隅には八年前には影も形もなかったはずの笹竹まで、小山を作って群生していた。なにぶん急な還都のこととて、正門のある南側は、既に下草や勝手に生えた灌木が除かれ、整然とした有様に整えられていたが、北側の後宮までは手が間に合わず、回廊や各々の建物の周りの下生えを申し訳程度に払ってあるばかりだった。

中大兄は足を止め、月を仰いだ。冷たい月の光が酔いを含んだ頬に快かった。北棟の一室で自分を待つ、その、月のように白い面輪が浮かんだ。奔馬の如く駆け出したい衝動を心を感じながら、しかし中大兄は月に照らされた荒れ庭に見入ったまま、頑なに歩をため

らわせていた。自らを制することは、今や天にかかる月のように満ち足りた幸福の中にある彼にとって、もはや苦しみではなかった。深まる夜寒に庭を覆う草の葉はしつとりと露を帯びていた。月は葉の表に細やかに瞬き、銀色に蒼ざめた光のもやが、草々の間を漂っていた。しかしやがて、中大兄は口元に優しい笑みを揺らすと、くびすを返した。回廊を進み、突きあたりの部屋の扉を押し開けた。

いきなり開いた扉の音に、部屋にいた女官たちは驚いた。驚き、それから入って来たのが中大兄と気づくと、慌ててその場にひれ伏した。部屋の奥、開け放った窓辺に藤色の裳をつけ朱華（はなすず）の袍を纏（まと）つて一人の女官が座っていた。化粧の最中であつたと見え、解きほぐした髪が袍の上に垂れていた。女官たちがひれ伏す中、この女官だけは恐れる風もなく、中大兄の方へ細面（ほそおもて）の顔を向けた。夜の惣闇（つつやみ）を掬（すく）つたような黒髪にふち取られた頬が、沫雪（あわゆき）の如く白い。丸みを帯びた大きな目に、女人の部屋に一言も声をかけず踏み込んだ非礼を咎める笑みが浮かんでいた。

微笑みながら、女人は手で、女官たちを促した。それを合図に女官たちは一斉に立ち上がり、急な侵入者によって中断された化粧を再開した。長い黒髪を丹念にくしけずり、襟元で束ねて整えた。前髪は膨らみを持たせて巻き上げ、菊花のかんざしを飾った。一人が紅壺（べに）をささげて進み出、小指でもって女人の唇に差した。純白の肩巾（かた）が広げられ肩に柔らかくかけられた。そして女官たちは、中大兄の左右をすり抜けて潮の引くように部屋を下がって行った。

肩巾を長く揺らして、女人はすらりと立ち上がった。

「兄上」

歩み寄った中大兄に、はしひこのひめみし間人皇女は両の手を差し伸べた。二人は手

を取り合い、引き寄せ合った。掌の温もりを透して、互いの内に溢れる幸福が密やかなおののきとなって伝わった。

* * * *

難波から飛鳥へ都を遷したいとの中大兄の奏上を、帝（ウツヒノミコ）3）は容れようとはしなかった。

帝の住まう長柄豊崎宮は、ながらのとよさきのみや大化元年の即位と共に難波の地へ都を遷して以来、六年もの年月を費やして造営した宮城であった。帝は一昨年の十二月晦日に宮に移ったのだが、しかし普請はその後も続き、昨年の九月になってようやく完成を見たばかりなのである。周囲のおちこちには寺の伽藍がそびえ、官吏の屋敷なども数を増しつつ整い、難波宮はいよいよ都城の形を成して来たところだというのに、中大兄はそのせつかくの都を早々に捨てると言うのだった。

内政を更に充実させるため、大和の旧豪族を今一度統べなおす必要がある、そのための還都なのだと中大兄は帝に説いた。確かに大和一元は、代々の都が営まれ、皇家とゆかり深い重要な地ではあるが、しかし今すぐ難波宮を捨てて急ぎ駆け戻らねばならぬ不穩が大和の地に起こったとは、帝の耳には届いていなかった。大和豪族を統べなおし、その統べなおした豪族の力を背景にして今まで以上に思い通りの政を行うのが中大兄の真意であることは、帝には容易に看破出来た。

帝と中大兄との間にはこの数年、対立と確執とが年を追うごとに深まりつつあった。そもそも帝が皇位に就き、中大兄が皇太子にたった当初から、政の主導権は帝よりもむしろ中大兄にあった。中大兄は、皇家と蘇我本宗家の権力闘争に刃でもって終止符を打ち、帝を皇位に押し上げた立役者である。負い目、などというものではな

いが、そうした拘わり合いもあつて、帝は中大兄が政を主導することとはある程度容認の態であつたのだが、しかし時が経つにつれ、中大兄には政を独断で動かす専横の振るまいが目立つようになり、帝との確執を生んだのだった。

「太子。飛鳥へ都を遷すことは、わしは望まぬ」

白い髭の下から、常の穏やかな人柄にも似合わぬ厳しい口調で、帝は中大兄の奏上を退けた。そう言つたきりくびすを返し、頑かたくな足どりで奥に入つて行つた。

還都を帝が快諾するとは、しかし中大兄は思つてはいなかつた。あるいは還都を奏上することで、帝と袂を分かつ機会を自ら作つたのかもしれないと見るや、中大兄は母であり先の帝でもある皇祖母尊を奉じる形で、政を飛鳥へ移すことを強引に決めた。中大兄の弟、大海人皇子おおあまのみこを始め公卿大夫、百官の人々など多くの群臣が与した。それはもはや帝に対する謀反に等しい暴挙であつたが、孤立した帝には、抗し得る何の手だてもなかつた。

宮中に不穩の暗雲が立ち込める一方、後宮の人々の様々な感情は、一人皇后である間人皇女の上に集まつていた。間人は中大兄の実妹だった。夫である帝と、兄である中大兄と、両者の板挟みとなつた皇后の心痛は如何ばかりであろうかと、後宮の女たちは事あるごとに憂わしい瞳を見交わしたのであつたが、しかし帝と中大兄の決裂が明白になって以来、静謐せいひつなまなざしの奥に、悲哀とも歡喜とも見える瞬きを沈めることの多くなつた間人皇后の胸の内を知る者は、誰もなかつた。

ただ一人知る者があつたとすれば、それは中大兄その人だった。

いよいよ長柄豊崎宮を去ろうという時、中大兄は帝より他には入らぬはずの間人皇后の部屋へ、白日の下躊躇もなく踏み込んだ。扉を両腕で無体に押し破り、間人の手を取るなり後宮から拉し去った。

女たちは眼前に繰り広げられた事態の意味が分からず、分からぬまま恐れておめき交わしたが、中大兄と間人の方はその間、眉ひとつ動かさず、また一声も発しなかった。世人の目には、それはあたかも二人がかねてより諮り合った結果であるように映った。しかし二人は諮ったのではなかった。また諮る必要もなかった。あにいうとして共に生きて来た二十数年という年月の中で、俗世において身は結ばずとも、天上において二つの魂を結び合わせ、思いを確かめ合つて相愛の情を深めて来た二人であつたのだから。

第一章 飛鳥遷都（一）（後書き）

1 皇極天皇。重祚してのち、斉明天皇。中大兄皇子・間人皇女・大海人皇子の生母

2 黄色味のない、薄い赤

3 孝徳天皇。皇極天皇の弟

注・季節描写について

「日本書紀」では1～3月が春、4～6月が夏、7～9月が秋、10～12月が冬と記述されており、この作品ではそれにならって季節を描いています。ご了承ください。

第一章 飛鳥還都（二）

* * * *

その夜、二人は初夜の明けるのを惜しみ、片時も眠らぬままに時を過ぎした。寢所の内に身を寄せて二人は、言葉やまなざしや仕種を交わしては、今宵自らが手にした幸福を確かめ合い、倦むことがなかった。部屋を囲む下草の茂みはもはやそよがなかった。草叢の囁きの代わりに、今は湿った土のすえた匂いと、冷えた野菊の匂いとがあつた。狭霧と共に流れ込んだ匂いが、地を覆う静けさを更に濃いものにした。満ち足りた静寂を一筋裂いて、夜鳥の鳴き音が、闇を越えて行つた。

「あの鳥は何？」

床の上に身を起こしていた間人^{はしひと}が訊いた。

「雁だ」

中大兄^{なかのおおえ}は先程から、間人の乱れた髪を櫛で梳^すき直してやっていた、その手を止めて答えた。

「西国の何処かの地へ向かう途中なのだよ。もう、雁が渡るよ
うな時分なのだ。間人、寒くはないか」

「ええ、少し肌寒くなりましたわ」

と、わざわざ寒さを言いつのつておいて、二人は誘い合うようにして夜具に身を沈めた。温もりを通わせ、ちらと笑み交わした。誰

はばかりする必要もなくなったというのに、この、生まれたばかりの恋人たちの間には、自らの恋に対する恥じらいが未だに凝^こっていた。そんな二人であったから、夜気の寒さを殊^{こと}更に言いたてるのは、互いに肌身を寄り添わせる、格好の口実となった。

胸元にくるまって、間人は中大兄の指先をもてあそんだ。臥^{ふしど}所の周りにめぐらせた白い帷^{とばり}に、指の影が大きくうごめいた。枕辺に灯した火の色を映して、間人の額や首筋の肌は温かな琥珀色に染まり、その様は何かこの上もなく愛おしい情感を中大兄の内にかきたてた。

間人はしばらく、二人の指を様々にかからめ、帷の上に揺れる影絵に他愛なく見入っていたが、ふと、手を止めて目を輝かせた。

「あら、わたくしたち、指が」

「指が、どうした」

「今まで気がつきませんでしたけれど、わたくしたち指の形がそっくりですね。ほら、御覧になって」

間人は中大兄の手を取り、自分の手と、親指同士が並び合うように指を組んで目の前にかざして見せた。並んだ二本の指は、太さの違いこそあれ、間人が言ったとおり、爪の形から関節のしわまで、型で押したように瓜二つであった。

「これは、驚いた」

中大兄はつぶやいた。

「今しがたまで、わたしも気がつかなかった」

父母を同じくしていながら、中大兄と間人の面立ちは、男女の違いということ差し引いても、互いにほとんど似かよったところが多かった。中大兄の目は竹を削いだように切れ長であったが、間人のは椿の葉のようにぱつちりと丸かった。中大兄はどちらかと言えば彫の深い顔立ちをしていたが、間人は小さな鼻と薄い唇の、彫浅い顔立ちであった。その他、額の広さにせよ、眉や耳の形にせよ、およそ重なり合う部分を探すのが困難なほどに、身体の特徴を異にしていた二人であったから、火影にかざされた二つの手の、まぎれもなく別々の人間のものでありながら、同一の人間としか思われぬほどに酷似したその有様に、中大兄は不思議な感動を覚えた。

「同じ血が流れているのだな」

中大兄は言った。傍らから間人がくすりと笑った。

「だって、あにいますとでございますのに」

中大兄は黙って笑みを返した。

傍らに寄り添っている女、今宵妻となったこの女と、情愛だけでなく血の絆でも結ばれているというその奇跡を、中大兄は改めて思ったのだった。このち、二人の情が憎悪に変わっても、いや、それすらも失われて互いに対し如何なる思いかいも抱かなくなったとしても、血肉を分けた兄妹であるという事実は消えぬ。手に手を取って背徳の闇に足を踏み出した二人には、それは草花を編んだ匂やかな花鎖よりも、身を締め付ける冷たい革紐かもしれぬが、しかしそれでも、中大兄は、この世で誰より愛おしく思う妻と自らとが、決して断ち切ることの叶わぬさだめで縛られているのだという思いに、酔うような幸福を感じずにはいられなかった。

中大兄は間人の手を掌に包み込んだ。こちらを見つめる間人の瞳にも、満ち足りた光が明るく輝いている。しかし陶酔ののちには常に寒々しい空虚が訪れるように、その瞳の奥底には暗い予感が既に、さざなみのように寄せていた。

「間人」

勇気づけるように中大兄は言った。

「我々は許される限り、共に生きよう。人も国も、いずれは絶える。だが男女の間に通う情のみは、天上の世で千歳に残るのだ」

深さを増した霧と共に、野菊の匂いがまた臥所に忍び入った。

* * * * *

間人とのことは公には出来ぬものであり、中大兄も公にはしなかったが、しかし宮内で起こっていることでもあり、間人皇女の立場は程なくして、宮中の人々の間に否応なく知られることとなった。皇太子が実妹と通じるという、有り得べからざる破倫はりんの事態に、心ある人は皆眉をひそめた。また一方では、皇位のことはいかなさるおつもりかと、不安の念にも駆られた。

内臣中臣鎌足うちのおみは、この件について最も気を揉んでいた一人であった。彼は中大兄と共に乙巳いつしの変の主謀者であり、以来常に中大兄のそばに控え、彼が押し進める政治改革を補佐して来た側近であり、盟友であつたのだが、しかしそれだけに、知らぬ間に太子と皇后が相姦の關係に陥っていたと知った時は、これがあの冷静沈着な鎌足かというほどの、驚きと狼狽を見せた。

特に皇族においては近親婚の当たり前であつたこの時代だが、しかし同父母のきょうだいの交わりは禁忌であつた。禁忌の穢^{けが}れを負っている者は帝にはなれぬ。つまり間人を妻とする限り、中大兄は皇位に就けないのである。鎌足の狼狽も無理からぬことであつた。

「皇后様を、離宮に移されては如何でございましょうか」

とうとう、鎌足は中大兄にそう、奏上した。が中大兄は鎌足の方をほとんど見もせず、そのつもりはない、と言下に退けた。

「内臣一人の意見ではございませぬ。群臣の多くがそれを望んでおります」

「これは奥のことだ。政ならともかく、奥向についてまで、群臣の総意を仰がねばならぬか」

「太子、奥向のこととは申しておれなくなり申した。実は、帝が難波宮で病に臥せっておられます」

遠回しな物言いを捨て、鎌足は本題を口にした。思いもかけぬ話に、中大兄は目を見張って振り向いた。

「左様な話、わたしの耳には入っておらぬぞ」

「あのような形で難波宮に置き捨てられた手前、帝と致しましては病のこととても、おいそれとは太子の耳に入れますまい。これは、難波宮に出入りしておる者から内々に伝えて参つたことにございます。帝はお体もお心も随分と弱られ、病は決して樂觀出来ぬものであるとか。内臣が先程申した意味が、お分かりでございましょう。」

皇位の問題は、はやもう、眼前に迫っておるのでございます。何卒、太子のご存念をお聞かせ願いたく」

ひと息に申し述べると鎌足は、中大兄の決断を待つように口をつぐんだ。中大兄は、左様であつたか、と口の中でつぶやいた。けおされたように床に視線を落としたが、しかしその表情は存外冷静で、鎌足がどこかで予想していた動揺はそこには見られなかった。ややあつて、中大兄が鎌足の方へ顔を上げた。内臣、と落ち着いた声で言つた。

「まだ誰にも申してはおらんだが、皇位については、わたしは母上に今一度、就いていただこうと考えておるのだ」

「何と」

予想だにしていなかった中大兄の返答に、不意を突かれたのは鎌足の方であつた。

「帝に背反し都を去つたわたしが皇位を継いだとあつては、要らざる反感を招くこともあるう。母上ならばそつした問題は起こるまい。我々はいわば先帝である母上に従う形で、飛鳥に還都したのだから」

「成程、左様なお考えであれば」

ようやく中大兄らしい政治思考を聞いたと、鎌足はほつと感情の矛を収めた。確かに中大兄の言うように、たとえ間人皇女の問題がなかつたとしても、今は母君である皇祖母尊を帝に戴く方が、物事を穩便に進めるには都合が良いように思われる。一度皇位を退いた者が再び帝になるとは前例のないことではあるが、そもそも母尊が存命のうちに今の帝に皇位を譲られたこと自体、既に異例であつた

のだから、今更重祚（ちようそ）をとやかく申す輩もおるまいと、鎌足は賛同の意を示した。

「良き案と心得まする。左様に進めましょう。しかし、太子」

鎌足はそば近くに顔を寄せ、声を落とした。

「お忘れあるな。母君様とても、いつまでもご健在ではないのですぞ」

群臣あまたあれど、このような不吉事を中大兄に向かつて口に出来るのは鎌足だけであつた。中大兄はこの、十も年かさの盟友の手をいたわるように取つた。

「内臣、分かってくれ。間人はわたしにとって誰より大切な者なのだ。我々は互いがこの世に生まれ落ちるその遙か昔より、ひとつがいの男女であつた。妹や、妻や、そのような俗世のつまらぬ呼び名では、我々の絆は表わせぬ。だが内臣、だからと申してわたしが皇位をおろそかに考えているとは思つてくれるな。その時が来たら間違はなく、しかるべき決断をしよう」

第一章 飛鳥遷都（二）（後書き）

一度退位した天皇が再び皇位につくこと

第一章 飛鳥遷都（三）

* * * *

分からぬものだ。

中大兄のもとを下がり廊下を一人歩みながら、鎌足はしきりに首を振った。その時が来たらしかるべき決断をする、先程そう言った中大兄の目には、一瞬まるで少年のような、初々しい沈痛の色がよぎった。それは鎌足が初めて見た、中大兄の一面であった。

『太子は、あのような目をなさるお方であつたのか』

いらだちにも似た驚きがあつた。国造りという難事業において長年に渡り苦樂を共にし、中大兄の股肱かっこにして最も良き理解者と自負して来た彼の、それは間人皇女に対する嫉妬の感情であるかもしれない。なかつた。

『分からぬ』

もう一度、鎌足は口の中で独りごちた。確かに皇后は情深く、よわい齡二十六を迎えた今も、面輪にむすめむすめした愛らしさをたたえてはいたが、しかし心根の優しい女など珍しくはない。何より中大兄に仕える妃、采女うねめを見渡せば、皇后よりも遥かに美しい者が幾らもいた。はなは甚だ無礼ながら、皇位と引きかえにするような妖しい魅力が皇后がそなえているようには、鎌足にはどうしても思われなかつた。とどのつまり、皇后だけが有する魅力とはやはり、同母妹という禁じられた恋の相手であるということに尽きるのであらうと思わざるを得なかつた。

もしくは戦利品という意識が太子にはあるのやもしれぬ。太子は帝と刃を交わしたのではないが、群臣と共に背き、政治権力を奪ったという点では帝を打ち負かしたと言つてよい。太子の野心的な人柄を思えば、自分に屈した帝の皇后を奪い、妻とするという、そこに魅力を感じたということも、ないとは言えない。

いずれにせよ、背徳の美酒にのぼせているだけのことであろう。

今は放つておくことだ。燃え上がった炎はいずれ鎮まるものだ。目くるめく陶酔はいずれ覚めるものだ。皇后様についてはお二方の間が疎遠になった頃おいを見計らい、改めて太子を説いて離宮に移つていただければよい。人の歴史が始まって以来、幾多の人がその謎に挑んでは斃^{たお}れて来た、相恋の神秘というものから遠ざかつて久しい鎌足には、中大兄と間人の恋は、ただそのように思われただけであつた。

* * * *

中大兄と間人の心の内は、しかしおよそ惑溺とは程遠かつた。むしろ別離こそが、最も親しい友であつた。二人を結んでいるものは人々が考えるような情痴でも快樂でもなく、いわばごく凡庸な兄妹愛であつた。あまりに無垢な、激しい形で表に現出したために、世人^{じん}の目にはかつて見たこともない異形の愛と映つたに過ぎなかつた。

内に通い合うものに穢^{けが}れがないその分、二人は自分たちを取り巻く外部に否応なく鋭敏にならざるを得なかつた。この契りの祝福されざる危うさを、世の聡き人々の無慈悲な目を、二人は誰よりもよく知つていた。如何に思い合おうとも決して添い遂げることの叶わぬさだめを、焼けた刃が身に迫るような切実さで感じるが故に、中大兄も間人も、尚更、互いに対して一途になるより他なかつた。

ただ二人の生母である母尊のみは、息子と娘の間に通う情愛の何たるかを理解していたように思われる。

鎌足が密かに帝の病を中大兄に伝えた翌月、ようやく難波から使いが来て、中大兄は母尊や間人、大海人など主だった者たちを伴って難波宮を訪れた。やつれた様を見せまいと、帝は気丈に起き上がって中大兄たちの見舞いに応えたが、病のひどく重いことは誰の目にも明らかだった。

その夜、中大兄は母尊に、帝がみまかられた際は、群臣を束ねる必要からも今一度皇位に就いていただきたいと、初めて打ち明けた。

「分かりました」

母尊は何も問い返すことなくうべなつた。

「即位致しましょう。太子、わたくしの命が続く限り、皇位のこと
は案ぜずともよい」

母尊の言葉の意を悟り中大兄は胸打たれた。彼は母の膝元に身を
投げ出すようにして、こうべを垂れた。

それから十日ののちの十月十日、帝は難波宮で孤独と失意の内に
世を去った。

* * * *

帝が薨去した翌年の一月、皇祖母尊は飛鳥板蓋宮で即位の儀を行
い、再び女帝となった。

即位に伴い、小墾田おはりだに皇居の造営が始められた。宮殿は瓦葺かわいりとな
るはずだった。この当時の建物は皇居といえども茅葺か板葺が主で
あり、瓦葺は寺院などによく見られるだけの、未だごく珍しい
様式であった。瓦を一面にふいた重い屋根を支えるには、太く堅牢
な柱が要る。今までのものよりも遥かに巨大な柱の立ち並ぶ宮殿を
もくろんだのであったが、思うような良木が得られず、やむなく場
所を岡本に移し、屋根も従来どおりの板葺にして、皇居はようやく
完成にこぎつけた。

皇居がひととおり完成すると、朝廷は休む間もなく立て続けに大
がかりな普請を命じた。飛鳥東方たむのみねの田身嶺の頂上に垣をめぐらせ楼
閣を造り、内乱に備えた山城とした。香具山から石上山まで水路を
通し、船で石を運ばせて皇居東側の山肌に巨大な防壁を築くことを
計画した。また吉野の山深い山中にも離宮を造営した。

それらの普請には、女帝自らの発案したものも含まれていたが、
しかしほとんどは、鎌足の奏上をもとに中大兄が進めたものであっ
た。

鎌足が矢継ぎ早の普請を強く奏上したのは、単なる都城の建設に
とどまらぬ、朝廷内に存在する反発への対抗策でもあった。

朝廷は必ずしも一枚岩ではなかった。先帝の下で中大兄は数年に
渡り様々な政治改革を押し進めて来たが、それを皆が皆もろ手をあ
げて歓迎したわけではなく、反発を抱く者は豪族、群臣の中に少な
からずいた。鎌足は、中大兄と間人皇女との道ならぬ関係が、そう
した一部群臣の冷ややかな感情を後押しすることを懸念したのだっ
た。

壮麗な宮殿の数々は、人々の目に帝の権威を揺るぎない強烈さで

灼きつけることとなる。皇家の威を高め、天下に広く示すことで、鎌足は朝廷内部の動揺を押さえ込もうとしたのである。

中大兄と間人の仲を鎌足が快く思っていないことに変わりはない。しかし母尊が重祚ちようそを諾し、中大兄が引き続き皇太子として政を執るといふ体制が確立された以上、鎌足としてはいずれ中大兄が即位するまで、女帝の治世を何としても守らねばならなかった。そのようなわけで鎌足は今、心ならずも中大兄と間人の恋の、最も強力な庇護者であった。

鎌足の策はとりあえず効を奏したと言ってよかった。女帝の即位ののち、高句麗、百済、新羅の国々、国内では越や陸奥の聞いたこともない辺境の地からまでも、調を奉る使いが次々と出来たばかりの岡本宮を訪れた。女帝はそれらの使いの者たちを饗応し、冠位を与え、国をあまねく統べる権力者の宮殿にふさわしい、華やかなにぎわいが続いた。

（第一章・了）

第二章 有間皇子の変（一）

「民の声がまた、かまびすしくなっておるな」

訪ねて来た鎌足に、中大兄は言った。

女帝の治世は三年目の春を迎えていた。この間、帝の威は確かに高まった。しかし度重なる労役に疲れ果てた人民の間には、不満の聲が高まりつつあったのも、まぎれもないことであった。特に香具山から石上山へ船で石を運んで垣を築くという例の普請は難航を極め、ようやく船で石を運んだと思えば垣が崩れ、その垣を直しているうちに今度は水路の何処かが壊れるといった具合で一向にはかどらず、一体防御の石垣とやらはいつ出来上がるものか、誰も見当もつかぬ有様であった。

「たふれこころ狂心の溝だとそしっておりますな」

朝廷を諷諫する童謡など、巷にはしきりに流行っていた。名もなき民に過ぎぬと侮っていると思わぬはずみに手を噛まれることになる、と鎌足は言ってから

「実は少々お耳に入れたき儀が。そのために今宵は参上致したのでございますが」

「まあ、待て」

中大兄は珍しく、鎌足の言葉を遮った。ひらりと座を立ち、

「ちょうど鷹の様子を見に行こうと思っていたところであったのだ。

そなたもつき合え。話はその後で聞く」

と、差し招いた。

地面に萌え始めたばかりの下草の夜露を踏んで、中大兄は鎌足と、宮の一隅にある鷹小屋へと向かった。既に夜を迎え鷹は檻の中で皆おとなしくしていた。横一列に並んだ檻を一つずつ覗き、一つの檻の前に立ち止まって舌を鳴らしながらえがけをはめた手を差し入れた。鷹は軽く羽ばたくような仕種を見せて手に乗って来た。中大兄が背や、黒い波文様を一面に連ねた胸を撫でてやると、鷹はしばらく心地良さげに目を細めていたが、やがて小首をかしげて中大兄の小髻こびんの辺りに嘴くちばしを伸ばした。ちょうど羽づくろいする時のように髪の間をしきりに嘴で搔いた。

「よく慣れておりますな」

少しはらはらしながら鎌足が言った。

「猛禽もつきんとてもこちらが手をかけてやれば応えるのだよ。そこは馬などと何も変わらぬ」

鋭い嘴が搔くに任せながら中大兄は答えた。

夜を迎えたと言っても宵の口であり、宮中に未だ人は起きている時分であったが、鷹小屋の中は包み込まれたように静かであった。鷹は神経質な鳥であるため、小屋には飼育役の鷹戸以外の者は滅多に近づかないし、外の物音に驚かぬよう壁を厚く作つてあるのである。それはつまり、小屋の中の音も、外へは洩れづらいということであった。

「内臣、わたしに話とは、有間ありまのことか」

やがて低い声で中大兄が言った。鎌足は、お聞き及びでございましたか、と頷いた。

「皇子におかれましては、近頃事あるごとに屋敷に人を集めては朝廷のそしりを言いつのつておられると聞いております。捨て置くべきではないかと」

有間皇子は一昨年薨去した先帝の嫡男である。母は左大臣安倍倉あへくら梯麻呂はしのまるの娘、小足媛おたらしひめであった。父帝亡き後、有間は病と称して自邸にほとんど籠もりきりの日々を過ごしていたが、夜毎酒を呑んでは訪ねた客人相手に例の普請の難航をそしたり、または酔いに任せて巷で歌われている朝廷諷諫の童謡を大声で吟じたりしているとの噂を、中大兄も耳にしていた。

先帝の遺児である有間には、皇位継承の権利がある。そうした立場にある有間が帝を批判するとは、捨てては置けぬ事態であった。治世は未だ安定したとは言い難く、民の間には朝廷への不満が高まっている今、もしも朝廷の不満分子が有間の下に集まるようなことがあれば、それは朝廷を二分する内乱につながる恐れすらあった。

「幸い、祖父である左大臣も、御母堂様も既に亡く、皇子には後ろ楯となるべきものがございませぬゆえ、たとえ酔いに任せて朝廷を誹謗ひぼうなさったとて、今日に明日にどうこう出来るものでもございませまい。しかし、皇子は来年、十九におなりあそばす。用心なされた方がよろしゅうございましょう」

鎌足は意味ありげなまなざしを向けた。中大兄もまた思いあたることがあると見え、眉をぐっともたげた。中大兄が法興寺で出会っ

た鎌足に導かれて、時の権力者であつた蘇我鞍作臣（くわしやくじのおみ）を討とうと決意したのが、まさに十九の年であつた。その時の中大兄の年に達しようとしている有間に、野心が仄めいている。有間の前に、それこそ鎌足のような人物が現れたら。中大兄は身の内に不気味なものを感じずにはいられなかった。

「出家させる手もある」

中大兄はつぶやいた。

「しかし先帝のことであたしに恨みを抱いている有間が素直に従うとは思えぬ。それに出家したとて先帝の血がなくなるわけではない。喉元の刃は残り続けることとなる」

中大兄は鷹の油を塗つたような黒い背を撫でた。しばらくそうしながら、丸く見開かれた金色の目を見ていたが、やがて音の出るようなまなざしを、鎌足に向けた。

「内乱などという事態は何としても避けねばならぬ。乱をたとえ治めたとしても、皇家の力は大きく削がれる。再び豪族が台頭し、帝を脅かすようになれば今までの苦労は水の泡だ。内臣、今宵有間の話を持つて参つたのは、ただ噂話をしようというためではあるまい。策を講じよ」

「承知仕りました。加えて、大田皇女様おおたのことでございますが」

大田皇女は中大兄の娘だった。来年十五になるのを待つて大海人の妃となることが既に決まっていたが、鎌足はそれを今年に早めてはどうかと言った。

「弟君によもや叛意はございますまいが、しかし反体制側に奉じられる危険があるという点では、立場は有間皇子と同じでございます。一刻も早く婚姻を結ばれ、お二方の縁を示されるべきと存じます」

「分かった」

中大兄は頷いて、ならば菟野^{うの}も、と大田と同腹の妹娘の名を口にした。

「菟野も共々に輿入れさせることとしよう。いずれはこちらも大海人の妃に入れるつもりであったのだ。それに姉妹一緒であれば当人たちも何かと不安が少なかるう。思つように致せ」

鎌足はこうべを垂れ、そのまま鷹小屋から出て行つた。手にとまつた鷹はようやく見慣れぬ人間がいなくなつて安心したのか放埒^{ほうちやう}な身震いを見せ、甘えるように中大兄の口髭を嘴で突いて来た。中大兄は舌を鳴らして鷹の仕種に応えた。

わたしは、^{かるのみこ}軽皇子とは違う。

中大兄ひとり残された鷹小屋は、手元の鷹が首を動かすたびに和毛がすれ合う、かすかな音さえもはつきりと聞き取れた。その静まり返つた中、中大兄は心の内につぶやいた。

それは遡ること十七代前、^{おあさつまわくのすくねのみこ}雄朝津間稚宿禰尊の御世の逸話だつた。^{きなしかるのみこ}帝の第一皇子、木梨^{かろのおいらつめ}軽皇子は智と武雄に優れ、皇太子となつたが、しかし同母妹である軽大娘皇女を愛して情を通じ、咎を負つた。軽皇子は皇太子であるために処罰することは出来ず、そのため軽大娘皇女は責めを一人で負い、伊予に流罪となつた。そして一方の軽皇子もまた人臣の信を失い、父帝薨去ののち、弟の穴穂皇子^{あなほのみこ}に討たれ

た。このように、二人とも最後は悲劇的な末路を辿ることになったのだと、かつて鎌足が諫めとして語ったその話が、ふと心に思い起こされたのだった。

「わたしには間人を守る力がある。軽皇子のようにはならぬ」

穴穂皇子は有間に、木梨軽皇子と軽大娘皇女は自らと間人に、姿はおのずから重なって、中大兄は思わず語気鋭く言い放った。鷹は驚いて羽を震わせ、ギツと一声、高く鳴いた。鳴き声の余韻がしじまに消えると、入れ替わるように小さく穿った明かり窓から、何か花の香りが流れ込み薄暗い空間を満たした。

第二章 有間皇子の変（一）（後書き）

蘇我入鹿

第二章 有間皇子の変（二）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

中大兄の息子、たけるのみこ建皇子が八才で病没したのは、翌年の夏だった。

建の母は蘇我石川麻呂の娘、そがいしかわのまろ遠智娘であつた。おちのいらつめ蘇我石川麻呂は乙巳の変における協力者でもあり、有間皇子の祖父にあたる安倍倉梯あへくらしはしまろ麻呂とともに左右の大臣を務めた、朝廷の重鎮であるが、しかし大化五年（六四九）、中大兄に謀反の疑いをかけられ妻子と共に自害した。

父が中大兄によつて殺されたと聞き、遠智娘は驚愕して嘆き悲しんだ。身も世もなく痛嘆し、そのあまり次第に心を病んだ。建は、母親が心身を病んで行く中で身ごもり、産み落とされたのだったが、そのためか、生まれつきの啞者で、ものを言うことが出来なかった。

「建をもつと可愛がつておあげなさい」

女帝はしばしば中大兄に頼んだ。中大兄とても息子を愛していないわけではなかった。しかし中大兄の中には、悲しみに半狂乱になり、夫の顔も、自らが生んだ皇女や皇子の顔すらも分からなくなつて死んだ遠智娘の哀れな姿が、悲しみと共に未だに心に色濃く灼きついていた。妻の悲しみ苦しみの化現であるかのように、身に不具を負つて生まれた息子を眼前に見ることは、中大兄には耐え難かつたのだつた。

そのように父との絆が薄く、母の愛情も知らぬ孫が、女帝には不

憫でならなかった。建は生来気持ちが優しく、女帝は尚更に可愛がり、膝元から片時も離さぬように慈しみ育てていたために、その建が看護の甲斐もなくみまかった時の悲しみはひと通りではなかった。いまきのたに今来谷に宮を建て殯もがり（１）を済ませても女帝の悲しみは去らず、冬に行くはずだった紀の国への行幸も取り止めるつもりだった。

「帝、紀温湯の明媚な風光は必ずや、帝のお心を癒すことと存じます。わたくしは行幸なされることをおすすめて致します」

そう言つて女帝に湯治を促したのは他ならぬ有間であつた。元々、この湯治は有間がすすめたものだつた。前の冬、自邸に引きこもり痛飲を重ねた因果から氣鬱を病むようになった有間の様子を見かね、側近の塩屋連制魚しおやのむらじこのしうろ（２）が自らとゆかりの深い紀温湯に、有間を伴つた。広々と開けた岩浜に白い波濤の次々と迫る、南紀の雄大な自然は、若い心にたまっていた鬱血をきれいに取り払つたようであつた。しばらくの逗留ののち、見違えるように明るさを取り戻して飛鳥に戻つて来た有間は、紀の国の景色の美しいことや温湯の素晴らしいことを女帝に語つた。女帝は心動かされ、自らも赴いてみたいと彼の地に行宮を建てさせていたのである。

詮方なき事であつたとはいえ、弟である先帝と晩年あのようにして袂を分かつたのは、女帝の中に一つのしこりとなつて残つていたから、その遺児である有間の示した心遣いは女帝にはやはり嬉しいものであつた。有間の奏上を容れ、女帝はかねてよりの日程どおりに、紀の国へ向かう船の人となつた。中大兄、大海人、妃たちに皇子、皇女から重臣らまで、宮中の主だつた者を残らず従えての、大がかりな行幸だつた。人々が出払つたあとの都の留守官は、中大兄の側近蘇我赤兄そがあかえが命じられた。

船は十月十五日、湯崎の津に入つた。

外海へ向かつて開かれた異郷の景色は、四方を山に囲まれた盆地に住む飛鳥の人々の目を驚かせた。空は大和よりもずっと広がった。海は難波の内海よりもずっと荒々しかった。そうして果てもなく広がってゆくと思われる空と海の彼方からは、胸を不思議に震わせる冴え冴えとした潮の香が、風に乗って運ばれて来た。その風は冬とは思われぬほど、暖かだった。吹き渡る風に、見たこともない巨大な葉を梢に揺らす野卑な樹木の姿なども、見る者に異国情緒や旅愁めいた情感を覚えさせた。

* * * *

昼下がり、自室に行こうとして中大兄は、廊下で後ろから呼び止められた。通りすがりの部屋から大田と菟野^{うの}の二人の娘が、二輪草のようにこちらに顔を並べていた。

「叔母上様が、皆で野菊を見に行こうとおっしゃっておられますの」

姉の大田が言った。

「父上も皆と一緒に参りませんか」

二人がかわるがわる話すところによれば、昼前、散歩に出た間人はたまたま出会った村の娘から、この近くに野菊の群生している浜があるとの話を聞いたのだった。浜の一角が見渡す限りに花の色に染まるというその有様を是非見てみたいと、娘は行宮の門前にとどめておいて、急ぎ同行者を募っているのだということであった。

「折角だがわたしは遠慮しよう。少し用があるのだ。しかしそなたたちはもう、大海人の妃なのだから、このような時は父ではな

く夫に真つ先に声をかけるものだよ」

中大兄は断りがてら、そんなつまらない諫めを言った。二人の少女は恥らった目を見合わせた。

「叔父上様は、もう誘いましたの」

そう言ったのは、娘時代の習慣が直らず、未だについ、夫を叔父上と呼んでしまうことの抜けない、菟野の方だった。

「でも、こちらは午睡がしたいからと断られてしまつて……」

「ほら、だから申したでしょう。男の方など誘つても無駄ですよ。放つておおきなさい」

部屋の奥から間人が笑いながら諫止するのが聞こえた。娘たちの肩越しに覗くと、女帝と間人を囲んで妃や皇女たち、女ばかり十人ほどが集まつていた。この顔ぶれが、共に野菊を見に出かける一団であるらしかった。間人は部屋を覗き込んだ中大兄に笑みかけ、しかし仕種だけは憎さげに、犬でも追うようにしつしと肩巾を振つて見せた。女帝が脇から手でたしなめたが、その様子も如何にも華やいで、愉しそうだった。湯崎に来て既に半月余が過ぎていた。来たばかりの頃は、美しい風光にも亡き建皇子の姿が思い起こされて何かにつけ憂いがちであつた女帝だが、案じた間人が毎日のようにのどかな浜辺の散歩に連れ出したり、村の語り部を呼んで珍しい物語を語らせたりして、近頃は少しずつ、明朗さを取り戻していた。

「その浜と申すのは遠いのかね」

中大兄は間人に向かって訊いた。

「遠くはありませんわ。先達の者は浜へ出て五町も歩かぬうちに着くと申しておりましたもの。わたくしがきちんと皆を連れ帰りますゆえ、ご安心を」

やがて、御付の女官なども加わって更に数を増した女たちの一団は、花叢はなむらのようにあでやかに群れ集いながら門を出て行った。女帝は間人に腕を取られ、珍しく輿に乘らず徒かちであつた。近場だからと言つよりも、それだけ今日は気分が良いのである。このような女帝を見るのは久し振りだつた。後宮の女たちが女帝を囲み、冬の澄んだ晴空の下、野菊見物などという可愛らしい遊覧にはしゃいで出かけて行く。それは美しい光景であつた。

* * * *

そろそろ日も傾こうという時分になって、女たちは遊覧から帰つて来た。中大兄は間人が部屋に戻つたところを捕らえ、湯に誘つた。

「母上は随分とお元気になられたな」

潮風の中、湯に体を伸ばしながら中大兄は言つた。ここ湯崎の温湯は波の洗う磯の岩間に湯が湧出している。湯口周りに掘り抜かれた岩板のくぼみがそのまま湯壺になつており、入湯しながら南紀の雄大な荒海の様を一望の下に眺めることが出来るのだつた。

「ええ、本当に」

間人は微笑んだ。濡れぬように髪を櫛で巻き上げておいて、するりと湯壺に滑り込んだ。

「お顔の色が良くなりましたわ。今日はね、浜で菟野に花輪を編んであげておりましたよ。」気分がよろしかったのでしょう」

「そうか。そなたには礼を言わねばな」

「何でしょう」

「そなたが氣遣つてくれたお陰だ」

「まあ。おやめ下さい、母上のお体を氣遣うのは当然ですわ。わたくしだって娘ですもの。兄上、もしかしてお忘れになったの？」

悪戯っぽく睨まれて、中大兄は苦笑したが、

「いや、わたしや大海人はそなたのようにはいかぬ。政の場で帝として接することが多いゆえ、母上はわたしと居てはどうしても気持ちが悪く落ち着かぬのだ。そなたがそばに居て、煩わしい事を考えずに母娘として甘えることが出来るというのは、母上のお心をどれほど安らかにしているか分からぬ」

間人は恥らったようにただ笑っていた。

「肝心の菊が浜はどうであつた」

中大兄は話を転じた。

「美しゅうございましたわ。あのような景色はわたくし初めて見ました」

間人は目を少女のように輝かせて、皆で見て来た浜の様子をあれ

これと語って聞かせた。そこは砂浜が海に向かってなだらかに落ち込んだ一帯で、菊花はその広々としたゆるやかな斜面を一面にうずめるようにして咲いていた。花の帯はところどころ、密になったりまばらになったりしながら、一町ほども向こうまで連連と連なっており、花の間に分け入ると

「前も後ろも花卉の黄一色で、陽の中に入ってしまったようでしたわ」

と、目を細めた。

「それにね、花の形も可愛らしゅうございますの。大和の菊とはやはり少し違いますのね。花卉がうんと短くて、小さな黄色い糸玉のような……」

「藤菜（ 3 ）の花のような感じが」

「そう、近うございますね。でももっと丸くて、小さくて。イソギクと、この辺では呼ぶそうですわ。磯辺に咲く菊ということでございますね」

「ひなびた、良い名だ。この暖かな異郷の地によく似合っている。その菊花の染める浜をわたしも見てみたくなった。間人、明日二人で見に参らぬか」

「よろしゅうございますとも。わたくし、道案内致しますわ」

第二章 有間皇子の変（二）（後書き）

- 1 葬儀
- 2 「制魚」の「制」は、正しくは「魚＋制」
- 3 たんぽぽ

第二章 有間皇子の変（三）

語らううちに空はいつしか赤錆色に灼けた。海のおもては紅蓮の色に染まり、おちこちに波がしらが金色に泡立った。灰青色の雲が一片、また一片とちぎれては、沈みゆく陽に吸い寄せられるように、沖の彼方へと流れ去った。間人は語るのをやめ、海の方へ目をやった。湯壺のへりに肘をもたせると、背が豊かな湾曲を見せて湯から乗り出した。夕映えの残り火が肌を流れ、沫雪あわゆきを赤く浸した。命絶えて行く者を見守るような莊嚴そうつこんな美しいまなざしが、暮れなずむ冬の海を見つめた。

人々が事あるごとに口の端にのぼす誹謗ひぼうが、間人の耳に入っていないはずはなかった。皇后の身でありながら帝に不義をはたらいた女であると、恥知らずにも血のつながった兄と通じた女であると、そして自らの邪欲のために太子の即位を阻んでいる女であると、そうした囁きを知らぬはずはなかった。

人々が中大兄の威を恐れたために、中傷の声はいきおい、間人一人の上に集まった。間人にとって皇太后（ ）という地位は、身を守る何の鎧にもなり得なかった。むしろそれは不義の証として額に刻まれた入れ墨に等しかった。間人は、あざみの藪を素足で歩む者だった。鋭い棘から身を守るものは何一つなく、踏み出す足元には道すらなかった。そして手足を傷つけ血を流してあざみ野を越えたとして、そこに待つのは安らぎではなく、いつの日か訪れる別離であることも、間人は知っていた。

人々の容赦ない指弾しだんに晒される苦悩を、人生の行く先に幸福の見えない不安を、しかし間人は一度としておもてに表わしたことはなかった。背徳に身を汚しながらも穢れけがを知らぬ、犯し難い清らかさ

をたたえた横顔は、中大兄の胸に一つの痛みとなった。

「兄上、どうかなさったの？」

ふと間人が振り向いた。何でもないと、中大兄はわざとふざけた仕種で間人の方へ湯のしぶきを飛ばした。くすりと、間人は笑った。指を差し伸べて、中大兄の髪に触れた。

「砂がついておりますわ」

そつと髪を撫でた指には、沁み入るような優しさがあつた。中大兄の心に射した翳りを間人は察したのだった。間人の巻き上げた髪が湯気を含んでほつれ、後れ毛が首筋に黒くうねって落ちていた。その頭上には夕闇が影を広げていた。夕映えの色は徐々に闇に吞まれ、代わりに波の音が耳に迫った。陽が落ちた薄闇の中に、間人の高く張った肩の先だけが、暮れ残ってうつすらと金色に光っていた。

二人の上に闇がしめやかに満ちた。夜は二人を抱いて水底へ深まり、そして朝へ向かつて再び泡のように浮かび上がった。

急使が、息せききつて行宮に馳せ参じたのは、鮮血のような朝焼けが二人の頬へ滴つたのと、ほぼ同時であつた。

* * * *

女官が小走りに来て、飛鳥からの急使であると告げた。間人は一体何事かと顔色を変えて身を起こしたが、中大兄に驚いた様子はなかった。

「案ぜずともよい」

一言言ったきり、帷とばしをかかげ手伝わせて衣を身に纏まとった。謁見の間では先に来ていた鎌足が、使者と共に中大兄を待っていた。

「有間皇子、謀反にございます」

使者は言った。

「して、捕らえたか」

中大兄に代わって鎌足が問うた。朝廷の一大事が告げられたはずであるのに、口調は気味悪いほど落ち着き払って、問うと言うよりは、あらかじめ使者の返答を知っているかのようなであった。

「捕らえましてございます」

果たして使者は言った。

「昨夜のうちに、有間皇子は守君大石、坂合部連薬、塩屋連制魚らと共に捕らえられました。既にこちらへ向かって護送されておるものと思われます」

「飛鳥からここまででは、四十里ばかりの道のりにござりまするな」

中大兄の方に視線を返して鎌足は言った。

「うむ、二、三日の内には着くであらう。使者」

頷いて見せてから、中大兄は床に平伏している使者に向き直った。

「使い、大儀であつた。飛鳥に戻り、蘇我赤兄^{あかえ}には、帝への忠勤に太子は殊の他満足していたと、そのように伝えよ」

三日ののち、謀反人の一行は湯崎に到着した。有間はずぐさま中大兄の前に引き出された。両手を後ろ手に縛り上げられ兵士の野蛮な腕に両脇を固められて、有間は引き立てられて来た。床に、折るように両膝をつき、目の前に立つ中大兄に顔を上げたが、その顔はわずかの間に別人のように面変わりしていた。目は落ちくぼみ、頬は土気色にあせ、力も、若さも、帝から譲り受けた高貴な面立ちも全て剥げ落ちた、虚ろな老人を思わせる面輪は、有間が味わった絶望というものをどんな言葉よりも雄弁に物語っていた。

* * * *

六日前、有間のもとを都の留守官である蘇我赤兄が訪うたのだつた。赤兄が屋敷に来たのは初めてであつたが、有間は数日前にも一度、機嫌伺いと称する赤兄からの使者の訪問を受けていた。突然の訪問を嫌がりもせず、有間は赤兄を招き入れた。帝の嫡男に生まれ、権力というものに身近に接して育った有間は、自らに取り入ろうとする者のおいに敏感だつた。しかも赤兄は蘇我氏の長だつた。乙巳の変で本宗家が倒れ、そのうちも右大臣蘇我石川麻呂が処刑されるなどのことはあつたが、蘇我氏は未だ朝廷に強い影響力を保っている。後ろ楯のない有間にとって、赤兄の接近は喜ばしいものでありこそすれ、決して厭うものではなかつた。

果たして、赤兄の用件は有間に助力を頼むことであつた。が、その中身は、有間の想像を越えていた。人払いを願つたあと、赤兄は、現朝廷の行っている無益な普請とそれに伴う重税をなじり、民に不満が高まっていることを述べた。そして、自分は同志と共に謀反の兵を挙げるつもりだと、有間に打ち明けた。

「帝や太子が都に不在の今をおいて他に、好機はございませぬ。皇子、我らと共に立つては下さいませぬか」

それは、内乱で今の朝廷を倒し、有間を新しい帝に戴くということであつた。始め、有間は少しいぶかつた。

「しかし赤兄、そなたは太子の近習ではないか。そのそなたが何故に、拳兵などはかうとするのか」

「私の異母兄、石川麻呂は太子にはかられたのでございます」

赤兄は声低く言つた。驚いて目を見張つた有間に赤兄はぐつと膝を進め、言葉を継いだ。

「あとになつて兄の無実が分かつたなどと言われておりますが、真実はそうではございませぬ。政において兄は太子の妨げとなつておりました。それを除くため、太子は帝に偽りの讒訴さんそをなされ、謀反の罪を着せ、自害に追い込んだのでございます。心密かに太子に恨みを抱くということでは、私は皇子の友でございます」

蘇我石川麻呂の事件があつた時、有間はまだ十才だったが、当時のことはよく覚えていた。おちこち行き来する不安げな足音、宮中の人々のただならぬ様子、やがて隠しきれず洩れ聞こえて来た血なまぐさい顛末。のちに石川麻呂の娘、中大兄の妃の遠智娘おちのいづめが父の死を悲しんで狂死したとの哀れな噂も、少年時代の暗い記憶だつた。

なまじ当時の記憶が鮮やかであつただけに、あの事件の黒幕が中大兄であり、その中大兄に恨みを抱いているとの赤兄の言葉は、有間の心に深い衝撃と共に強い真実味をもって響いた。この若く一途

な、そして孤独な皇子はそのまま、蘇我赤兄という人間を信じたのだった。

一日置いて、今度は有間の方が赤兄の屋敷を訪ねた。有間の側近である塩屋連制魚、守君大石、坂合部連薬を加えた五人は、人目を避けて楼に上り密議に入った。

赤兄は既に拳兵の具体的な段取りをまとめていた。まず、手薄になった宮殿に焼き討ちをかけ、続いて兵五百をもつて女帝らのいる湯崎を攻める。その一方で淡路と湯崎を結ぶ航路を遮断すれば

「あちらはもはや身動き叶いませぬ」

「水軍が要りますな」

「舟ならば私が集めましょう」

紀の国の塩田管理の任にあり、海人族を統べる立場にあった塩屋連制魚がつけがった。

ひと通り話し合ったのち、五人は誓いをたて別れた。そしてその夜半。有間が就寝したあたりを見はからい、赤兄は配下の物部朴井もののべのえのいのむらししび連鮪に命じ有間の屋敷を囲んだのであった。

* * * *

「何故に帝に対し謀反を企てたのか」

足元の床にひざまずく有間に、中大兄は厳しい口調で問うた。有間は一瞬、何事か言おうとする素振りを見せたようだったが、見

下ろす中大兄の目を見ると、そのまま口を閉ざし在らぬ方を見つめたきり黙り込んだ。中大兄は続いて、有間が朝廷の普請について批判を繰り返したことや、拳兵の計画、密議の日に取り交わした誓紙などについても、真偽を問い、かつ詰問したが、何を問われようと、有間は頑なに口を閉ざして一言も発しようとはしなかった。

信ずる友と頼んだ蘇我赤兄の手に捕らえられた時、有間は、全ては中大兄が張りめぐらせた罠であつたと悟つたのだつた。帝への謀反は大罪であつた。その大罪が中大兄の手で仕組まれたとは、すなわち、これは始めから、有間を殺すつもりで書かれた筋書きであつたことに他ならなかつた。今、中大兄がしたり顔で行っているのは事件の詮議などではない、有間の首を刎ねる刀を研いでいるのである。赤兄が語り聞かせた蘇我石川麻呂の話は、愚かしくも有間自身がたどりゆく運命であつた。

「有間、何か申すことはないのか」

虚ろな目で在らぬ方を見つめたまま、阿呆のように黙りこくつている有間が少し薄気味悪くなり、中大兄は声を荒げた。有間の目が揺れた。孤独と絶望に苛まれた瞳をゆっくりともたげ、初めて中大兄にまっすぐ、まなざしを向けた。

「何故にと、お尋ねになりましたな」

震えを悟られまいと、有間は精一杯、声を張り上げた。

「皇太子中大兄、いや、間人皇太后の夫　私が何故朝廷に叛意を抱いたか、謀反の企てに身を任すに至つたか、それは誰よりもあなたが存じているではありませんか」

その場に居合わせた者は凍りついた。息を呑んで有間を見つめ、それから草が風になびくように、皆は一斉に、中大兄の方を窺った。眉ひとつ、中大兄は動かさなかった。先刻詰問を繰り返していた時とまるで変わらぬ、落ち着き払った冷徹な表情で有間を見つめ、更に何事が言うのを待っているかのようですらあった。有間は食い入るように中大兄を見上げたが、やがてがつくりと力なく首を折った。

「有間皇子の謀反を企てたことは明白だ」

それが合図であったかのように、中大兄は隆々たる声で言い渡した。

「帝への叛逆は最も重い罪であり、温情の余地はない。自らの死をもつて贖いとするがよい」
あがな

第二章 有間皇子の変(三)(後書き)

先帝の皇后

第二章 有間皇子の変（四）

* * * *

詮議を終えて部屋を出ると既に辺りは宵闇であつた。夜風の涼しさにほつと気が緩むと共に、中大兄には、飛鳥から使者が駆けつけたあの朝以来会っていない、間人のことが氣遣われた。血のつながりはなくとも、皇后と帝の嫡男という互いの立場上、間人は有間とはそれなりに近しかった。その有間が謀反を企てたとの報に、心穏やかでいるとは思われなかった。

中大兄は間人の部屋を訪ねた。間人は開け放った窓辺にたたずんでおもてを眺めていたが、入って来た足音を背後に聞いて振り向いた。中大兄を待っていたと言うよりは、中大兄が来ると知っていたような表情だつた。

間人が誘うような仕種を見せた。誘われるまま、中大兄は間人と共に部屋を出、門をくぐつた。海岸へ通じる野辺に出ると鼻先にもう、潮の香が届いた。砂地を選んで生える丈の低い下草を踏んで二人は砂浜へ下りた。

月に照らされて海は影のように静まっていた。時折、波音と共に波がしらが刃のように白く瞬いたが、しかしすぐに黒い潮の中に溶けて消えた。月の周りに雲がわなないた。月が明るいために夜にも拘らず雲はくつきりと白く、空だけが昼の余韻に浸っているようだった。

二人は波沿いを歩いた。風に煽^{あお}られて肩巾の裾が藻のように夜陰を漂った。間人の体を冷たい潮風に晒してはと、中大兄は海側に壁

になつて歩いた。足元には波が砂を舐めて泡立つ可愛らしい音がしていた。一方で沖には潮流のうねる重い水音がしていた。遙か遠方の波音と、すぐそばの水音とが、まるで同じ明確さで耳に入ってくるのが不思議であつた。

「何処へ行く」

傍らを歩く間人に中大兄は訊いた。菊の花を見に、間人は一言答えた。

「約束致しましたから……」

そう言われて、中大兄はようやく、イソギクを見に行く約束が、有間の事件が起こつたためにすっかり流れてしまつていたことを思い出した。

やがて二人は菊が浜に着いた。下草を踏みしだいて間人は花に分け入った。中大兄もあとに続いた。花叢はなむらの中に踏み入るとたちまち波の音は咲き群れる花々のそよぎに変わった。潮の匂いは、大和の野菊とはどこか違う、野趣の強いつんとした菊花の匂いに変つた。小さな毬のような菊花が見渡す限りの彼方まで、浜を一面に埋めている。たたずむ二人の足元に、匂やかな花の波が柔らかくうねつては押し寄せた。花叢の間に立つと陽の中に入つたようだ、あの時間人は言った。しかし今、黄色いはずの花弁は月の光の下で皆蒼白く色あせ、二人の周りには、雪原の如き荒涼とした有様が広がっているばかりであつた。

「皇子は」

初めて、間人が訊いた。

「死罪と決まった。帝への叛逆は最も重い罪だ。加えて、以前より朝廷の批判を繰り返していたこともある」

「皇子は、何事が申されましたか」

言うべきかどうか、中大兄は一瞬迷った。が、心無い風聞ふうぶんの形で耳に入れば、かえって間人は傷つくであろうと思い返し、そのままを伝えた。

「わたしの問いには、有間は何一つ答えなかった。しかし最後に、自分が何故謀反を企てたかは、皇太后の夫である中大兄が知っているはずだと、こう言いおった」

「そうですか。そのようなことを」

間人は目を伏せた。潮風に、周囲から花のそよぎが湧き上がり、後れ毛が揺れた。近寄って、中大兄は額にこぼれた髪をかき上げてやった。

「そのような顔をするな。これは政だ。まつじつとわたしが負うべきことだ。そなたが責めを感じる必要はない」

「いいえ」

目を伏せたまま間人はかぶりを振り、折角かき上げた後れ毛はまた、はらりと額にこぼれかかった。

「皇子の死は、兄上お一人ではなく、わたくし一人でもなく、わたくしたち二人が背負うべきものですわ。皇子の言葉の意味を兄上も

お分かりでございましょう？ わたくしたちの契りのために、皇子は死ぬこととなったのです」

顎を上げ、水が引いたように間人は中大兄に両の目を開いた。

「帝が薨^こじられたところで、皇子は一度皇位の望みは捨てたと思いますわ。父帝と、皇太子である兄上との間があのように深刻なことになっては、即位した兄上の皇太子に立つことが出来ようなど望めませぬもの。けれど……」

しかし、父帝薨去^{しうきょ}ののち、その後を継いだのは何故か皇祖母尊^{すめおやのみこと}であり、中大兄は即位することなくそのまま皇太子の地位にとどまった。その不可解を聞いた時、有間^{ありま}は周りの人々が氣遣^{きぢ}ってひた隠しにしていた、中大兄と間人皇后の道ならぬ関係に、おのずから思いあたったのに違いなかった。そしてそう思っ^{おも}て周囲の囁^{ささや}きに注意してみれば、自らが察したところを確信に変えるような話は幾らでも耳に入^こって来た。

あの時、父帝の悲嘆は群臣の背反よりも皇后の裏切りの方に、より深かった。そしてその心痛が遠因とな^なって父帝は憤死したに等しかった。間人皇后が何故帝を捨て中大兄に従^{したが}ったかを悟^{さと}って、有間の、中大兄に対する憎悪は尚一層、強いものとな^なったのだ^が、しかし同時に、憎しみよりももっと厄介なものを有間の中に植^うえつけることとな^なった。それは、希望だった。

皇太子中大兄が即位出来ぬ^なると、当然有間に皇位の可能性が^あ出て来る。加えて、重税に対する民の不満、朝廷の政に対する批判、そして中大兄と間人への誹謗は、有間の耳にも入^こっていた。朝廷の弱みを突き、つけ込めば、もしや中大兄を追^おい落として自分が帝となることも可能な^なのではないか。それは父の無念を晴らすことにな

る。間人皇后の裏切りに報いることも出来る。

「希望は時に、絶望よりもむごいものでございます。皇位への望みが芽生えたがために、皇子にはお心を病まれるばかりに、御自身の無力が耐え難くなったのでございましょう。そして皇位を望んだがために、自ら進んで罅に陥ることにもなったのでございましょう。希望が、皇子の目を盲めくらにしたのですわ。そしてその、抱くべきではない希望を抱かせたのは、他ならぬわたくしたちです」

「そなた」

ぎくりとして、中大兄は間人の目を覗き込んだ。

「そなた、気づいておったのか」

静かに澄んだ瞳のまま、間人は頷いた。

「知っておりますたわ。兄上は皇子を、恐らくは謀反の咎を着せて亡きものにするおつもりであろうと思っております。でも知っておりますが、わたくしは何の手も差し伸べませんでした。皇子を見殺しに致しました。皇子が生きております限り、いつ如何なる形で、兄上の身を危うくするか分かりませぬ。皇子が朝廷に不満を抱いているとは、既に周知でございましたから」

口中に苦いものがこみ上げた。有間を陥れ、処刑することも、それにより先帝の遺児を殺したとの暗い汚名を着せられることも、中大兄にとっては何ほどのことでもなかった。がしかし、気づかぬうちに間人までもを、有間謀殺の共謀者に仕立てていたという事実は、中大兄には耐え難かった。唇を噛みしめ、中大兄は血の吹き出るような目を間人に向けた。間人はそんな中大兄の手を取り、掌に包み

込んだ。

「兄上、皇子の命を奪ったのは、兄上だけではありません。わたくしでもあるのです。皇子の死はわたくしたちが二人で負うべきものですわ。ただ、わたくしたちだけが。如何に兄上の寵を受けていようと、他の女人には、この闇を兄上と共に分かつことなど出来ませぬ。わたくしただ一人ですわ。兄上も分かつておられるはずです、負わせて下さいませ。兄上、わたくしは、光ばかりではなく闇も、兄上と分かち合いとうございます。父母の血だけではなく皇子の流した血でも、兄上と結ばれとうございます」

訴える間人の声は熱を帯びた。見上げるおもては薄闇のために化粧の彩が除かれ、幼い頃の面立ちを彷彿とさせた。浮かされたように輝く目は、中大兄に小さな手を引かれて野遊びに出かけた、はしやいだ瞳と重なった。唇が語る言葉とはあまりに不似合いな、そのいとけない思い出の影が咄嗟に痛ましく思われ、中大兄は腕の中に細い体をかき抱いた。間人はよろめいて、もつれた足が花を幾本か踏み折り、菊の香りが鮮やかに足元から立った。嗅ぎ慣れぬ異郷の野菊の香りの中に、慣れ親しんだ間人の肌の匂いが、くつきりと輪郭を描いて、中大兄の鼻を打った。

二日後の十一月十一日、しちごのむらじう有間もりのきみおあいわは藤白坂で絞首となった。塩屋連制しおやのむらじう魚は斬首、守君大石と坂合部連薬は、上毛野国と尾張国に、それぞれ流罪となった。

（第二章・了）

第三章 女帝薨去（一）

有間皇子を首尾よく謀殺し、朝廷内の憂いを除いた中大兄であったが、しかし息つく間もなく、更なる脅威が国の外より迫っていた。有間皇子の変から二年後の斉明六年（六六〇）一月、高句麗の使者として来訪した乙相賀取文おつそうがすもんより、百済が唐と新羅によっておびやかされつつあるとの報がもたらされたのである。

当時半島は、百済、高句麗、新羅の三国に分かれ、北の高句麗と南の百済が結び、一方で新羅は唐に接近して、互いに覇を争うという状況だった。唐はここ数年来、もっぱら自国と国境を接する高句麗と、主に遼東を戦場として攻防を繰り返していたのだが、その矛先を突如、百済へと向けて来た。それは同盟者である新羅よりの派兵要請にに応じてのことであつたが、しかしこの頃、百済義慈王ぎじおうには政に倦んで酒色にふけることはなはだしく、そうした内部の紊ひん乱らんを、唐が百済平定の好機と見たためでもあった。

百済は倭国とは多年に渡って朝貢の關係にあり、朝廷では百済を、いわば半島における重要な勢力拠点と捉えていた。百済が唐に侵されれば、すなわち倭国は大陸から勢力を失うこととなる。しかし、かと言つて百済に援軍を送れば強大な唐と刃を交わさざるを得ない。前年の七月に唐に遣わした使者も未だ帰国しておらず、唐の動きが掴めぬ状況下では、如何に処するべきか朝廷は方針を定めかねた。

朝廷は知るはずもなかったが、実はその頃、その遣唐使の一行は長安に幽閉の憂き目を見ていた。倭国が百済侵攻の妨げとなることを厭った唐の高宗が、情報遮断のため一行を足どめした形であつた。

廟議びやうぎは進まず、時ばかりがいたずらに費やされた。するうち、九

月五日、今度は百済から使者があつた。沙弥覺従さみかくじゆというその僧がたずさえて来たのは、驚くべきことに百済転覆の報だつた。ふた月前の七月、唐の將軍蘇そ定方ていほうが新羅軍と共に百済を挾撃した。三日の戦いのうち百済義慈王は唐に下り、君臣共々捕えられて唐へ連れ去られた。しかし、王を失いながらも遺臣の中に立ち上がるものがあり、叛乱軍を動かして今は奪われた内の二百余城を回復するに至つていると、沙弥覺従は奏上した。

使者のもたらした知らせが、朝廷に与えた衝撃は大きかつた。唐の百済侵攻がこれほどの速さで現実のものとなろうとは、誰も思いもよらぬことであつた。中大兄はそれまで態度を決めかねていたのだったが、電撃的な唐の動きを知るに及んで、心を決めた。

「朝廷は百済に救援の兵を送る」

廟議の席で中大兄は告げた。

「百済が倒ればおのずから高句麗も倒れよう。新羅が既に唐の属国となつた今、それは唐が半島の全土を手中にするということであり、今度は我が国が、唐の侵攻におびやかされるということだ。このまま百済が滅ぶに任せるべきではない。二百年の昔、大泊瀬おおはつせわかたける幼武尊みこと（１）が斃たおれた百済に再び命を与えたように、我々も国をかけて百済を救わねばならぬ」

「わたくしも太子に賛同致します」

女帝も立ち上がった。

「百済はただの隣国ではない。百済王は代々、我が国から妃を娶めとり、皇子の中には人質として我が国で育つた者も多い。いわば血肉を分

けた兄弟である。聞けば今、唐軍は軍紀が乱れ、狼藉は罪もない女子供にまで及ぶと言う。多年兄弟の交わりを結んで来た国の、かかる惨苦を見捨てたとなれば、我が国は義も何も持たぬ蛮国と見られよう。そしてそれこそが、他国の侵攻を許すものではないか。唐との戦いは難儀だが、危うきことを承知の上で、我々は信義というものを世に示すのである」

翌十月、百済で叛乱軍を率いる、將軍鬼室福信きしつぷくしんの使者が来訪した時、朝廷の方針は固まっていた。使者は、唐人の捕虜百余人を献じて来援を請うた。加えて、百済の王に戴くため、人質として朝廷に滞在していた、皇子扶余豊璋ふよほうしょう（2）の帰国を願った。女帝は、百済再興に朝廷は労を惜しまぬことを告げた。

* * * *

年も押し迫った十二月二十四日、女帝は難波に赴いた。長柄豊崎ながらのとよさき宮のみやで、集まった群臣を前に武器調達の詔みことのりを発すると共に、国をあげての外征にのぞんで自ら筑紫へ渡り軍の指揮を執ると告げた。外征のために帝が畿内を離れるのは、四百年前の神功皇后以来のことである。

女帝を乗せた船は、年明けて一月六日には早くも難波の津を発した。皇太子中大兄、大海人、腹心中臣鎌足を始めとする朝廷の要人から後宮の女たちまでが、付き従って船上の人となった。それは事実上筑紫への遷都と言ってもよかった。船団は吉備の大伯おおお、伊予の熟田津なかつを経て、三月二十五日、筑紫の那大津に到着した。

女帝はまず那大津から程近い磐瀬行宮いわせのかりみやに入り、ここを本営としたが、翌四月、鬼室福信より、唐が大軍をもつて高句麗の攻略を本格化させたとの報を受け、大事をとって南へ数里下った朝倉に、新た

な行宮を設けた。

宮を移すうちに筑紫は夏を迎えた。この年、暑さは常になく厳しく、加えて海からの風は湿気を含んで、朝倉の地は連日不快な蒸し暑さに覆われた。気候の悪いせいで、宮中には病が流行った。女帝は中大兄と共に気丈に軍務の指揮にあたっていたが、新しい行宮に入って幾日も日を置かぬうちに、とうとう女帝自身が、病に臥してしまった。

女帝が病臥したことは宮中に不安の影を広げた。この朝倉橘広庭宮の造営には、朝倉社の神領の木を切って建材としたため、その祟りではないかと恐れる声がしきりと囁かれた。宮殿で鬼火を見たと訴える者もあった。

また人々は、神功皇后の説話などとも思い起こさずにはいられなかった。先のとおり、帝自らが畿内を離れて外征の指揮を執ったのは、女帝を除けば神功皇后ただ一人だった。神功皇后は夫である仲哀帝に従って熊襲討伐に筑紫に赴き、陣中で住吉大神より西海の宝の国を授けるとの信託を受けた。のちに皇后はその言葉の告げるところに従って新羅を攻めるのだが、神懸りした皇后の言を帝は信じず逆に住吉大神を非難したため、祟りを受けて急死したというのだった。

そのように、二人の女帝の間に垣間見える奇妙な符合もまた、宮中に不吉の念をかき立てるものであった。

第三章 女帝薨去（一）（後書き）

- 1 雄略天皇
- 2 百濟義慈王の皇子。631年に人質として来朝した

第三章 女帝薨去（二）

* * * *

「兄上、母上は もう長くはないかもしれませぬ」

ある時、大海人が不安げな面持ちを運んで来るなり、中大兄に不吉を言つた。

「何かあつたのか」

驚いて中大兄は訊き返した。

「つい先程、母上の寢所の方で何やら声がしたので、行つてみたのですが」

声をかけて帷をかかげると、女帝はひどく取り乱した様子で臥所の上に半身を起こし、左右の女官に何かを言いたてている最中だつた。女官がどうにかなだめようとしているのだが、女帝は蠟のように蒼ざめながらしきりに首を振つて、首を振りながら明確には聞き取れぬ言葉を、うわずつた声で繰り返していた。大海人は女官の脇をすり抜けて女帝の体を抱いた。

「母上、如何なされました」

「ああ、大海人」

いきなり強く抱きかかえられて女帝ははっと我に返り、大海人の姿を認めるとすがりついた。指が食い込むばかりに息子の腕を掴み、

鬼が、と一言、声を震わせた。

「鬼？」

「帷の間から鬼がこちらを窺っていたと申されて」

女官の一人が困惑したような、しかし恐ろしげな様子で帷の合わせ目の一カ所を指した。帷はきちんと閉じられていて乱れはない。ただ、夏場のことでめぐらせた帷は麻の薄布である。向こうがわずかに透けるため、何かを見違えたのだろうと大海人は思ったが、

「ただの影などではなかった。帷を少しかかけて隙間からわたくしを見ていたのだよ。その恐ろしい目をはつきり見たのだよ」

女帝はおびえて訴えた。大海人は立ち上がって周りをひと通り調べた。無論、怪しい物の怪など見つかるはずもなく、鬼と見違えそうな何物も辺りに見出せなかった。

「母上。鬼神は悪しきものを喰らうと申します。鬼が現れたとはまさしく、病が回復する証ですよ」

努めて快活に笑いながら大海人は女帝を寝かしつけた。手を握って傍らに付き添ううち、女帝は幾分落ち着き、眠りに落ちて行つたが、大海人はたった今目にした痛ましい姿に、尚しばらく枕辺を離れられなかった。

「わたくしはあのような母上のお姿は初めて見ました。病で心身が弱れているという、ただそれだけではないように思われてなりませぬ」

大海人の話を、中大兄もまた痛ましい思いで聞いた。国の大きな転換期につこう十一年もの間帝として朝廷を支えて来ただけあって、女帝は常に気丈な人であった。そして理知的な人であった。何事かに取り乱すことすらなかった人が、物の怪の幻を見て子供のようにおびえるなど、常の女帝とも思われなかった。女帝を女帝たらしめていた魂がもはや半ば体を離れ、抜け殻の肉体が勝手な振る舞いをしているような気味悪さと悲しさを、中大兄は同時に感じずにはいられなかった。

「兄上、母上をこの出兵に伴われたのは、やはり間違いだったのでは」

そう言つて、しかし言つてしまつてから大海人は恥じたように目を伏せた。

「言葉が過ぎました、申し訳ありません。筑紫へ来ることを望まれたのは母上御自身です。百済の救援に母上は大変意欲を見せておられましたゆえ。兄上が責めを負うことではございません」

分かつているというふうに中大兄は頷いて、大海人の背を撫でたが、しかし咄嗟に言うべき言葉は何も出て来なかった。筑紫への出陣は女帝の意志であり、そして兵の士気を考えれば、帝が自ら軍を率いたのも決して間違いであつたとは言えない。がしかし、女帝の高齢を思えば、大海人の言うとおり、言葉を尽くして思いとどまらせるべきであつた。長い船旅と筑紫の気候とが母帝の命を縮めたのは間違いなかった。

女帝が死の床についたのはそれからひと月のちであつた。中大兄、大海人、間人、三人の子供らが枕辺に集い、死に行く母帝を見守つた。中大兄と大海人は左右から手を握り、間人は小さく泣きな

がら母の頬を幾度も撫でさすっていた。遠巻きに控える妃たちや女官のすすり泣く声が、さざなみのように部屋を行き来した。

一刻が経ち、二刻が過ぎた。深く眠る女帝のおもてからは苦しみの色が次第に去り、代わりに犯し難い威厳の光が射し始めた。このひと月、病苦の中で全て奪い尽くされたかに見えた女帝の誇りであったが、今、死という更なる苦痛と相対するに及び、その高貴な魂は息を吹き返し、帝としての誇り高い姿を取り戻したのだった。そして皆が見守る中、一息、細く長い吐息を洩らし、女帝の息は静かに遠のいて行った。

斉明七年（六六一）七月二十四日、朝倉橋広庭宮で、女帝は六十才の生涯を閉じた。八月一日に喪の儀が行われ、ふた月後、その屍は船に乗せられ飛鳥への帰路についた。

* * * * *

女帝の船を見送ったその夜、中大兄の影はひとり行宮の庭にあった。人々の皆寝静まった宮に物音はなく、あるのは薄雲に襟をうずめて中天に漂う弓張り月ばかりであった。月の投げかける曖昧な明るさゆえに、地表を覆う静けさは尚のこと、際立たせられているようだった。

気がつけば季節は既に秋も過ぎ冬を迎えていた。樹上を燃やしていた葉叢いばばはいつしか失われ、筑紫の地を丸ごと灼き尽くすかに思われた天空の炎も衰えた。草の葉はもはや照り映えず、代わりに霜が枯れ草を刃のように鋭く光らせていた。

と、窓を突き開ける軽いきしり音がどこかでしたと思うと、視界の隅に白い影がちらりと揺れた。影を中大兄は目で追った。庭の遠

くに見える窓が一つ開き、寝衣しんいを纏まとった人影が窓辺にもたれた。それは、間人だった。額を窓枠にもたせ、物憂げな様子でまなざしを庭に向けていた。解きほぐした髪が墨のように白い寝衣に流れていた。ちょうど月があたっているのか、蒼い闇の中に窓まど枠に置かれた指先がくつきりと白かった。

「間人」

近づいて声をかけると、間人の姿は驚いて窓の中の闇に沈んだが、声の主が中大兄と気づき、白い面輪はすぐまた月明かりの下に浮かび上がって来た。

「兄上、まだ起きていらしたのですか」

と、氣遣わしげに小首をかしげた。

「寝るつもりであつたのだが目が冴えてしまつてな。庭を歩いていたのだ」

「氣が高ぶつておられるでしょう。疲れのせいですわ。でも寝つけぬからと言ってこのような寒夜に出歩いては、それこそお体に触りますよ」

「着込んでいるから心配はない。そなたこそ寝衣などで窓に出てはならぬ。筑紫は南国と言っても、冬は大和と同じくらい冷えるのだから」

口から洩れる息の白さを見て、中大兄は今更のように夜の寒さに気がついた。手で触れてみると、たった今窓辺に出たばかりなのに、間人の髪も頬も既にひんやりと冷たかった。

「これ以上夜気にあたっては毒だ。もう中に入れ」

「兄上も部屋にお戻り下さい」

「わたしはもうしばらく庭を歩いてから休む。まだ眠れそうにないのだ。わたしのことは気にするな」

「いけませんわ。また忙しくなるのですよ。眠れなくとも体だけでも休めて下さい」

間人は中大兄の手を取って窓框から引き離すと、胸板を軽く押して部屋に戻るよう、仕種で促した。が、中大兄と視線がぶつかるとその目は急に翳った。月が雲に吞まれるように、すうつと間人の顔がうつむいた。背中から髪が滑り落ち、表情を隠した。

「間人、如何した」

間人は一瞬子供のように首を振って顔をそむけた。が、すぐに向き直り、今度は自分から、中大兄の肩に額を押しあてて突っ伏した。

「兄上、わたくし……」

髪の間から小さくした声は、しかし途中で引きもぎったように唐突に絶ち消えた。間人はそのまま黙り込み、うつむいた陰で指が震えながら中大兄の手をきつく握りしめた。肩の上に思いつめたようにわななく吐息が聞こえた。

中大兄は間人の震える手を握り返し、もう片方の手を背に回して体をしっかりと抱いた。中大兄には間人の胸が分かっていた。この

七年の間、母を帝に戴くことで中大兄は皇太子の立場を保って来た。しかし女帝が薨去した今、もはや皇太子にとどまることは出来ない。禁忌の妻である間人を遠ざけ皇位に就かねばならないのだった。

女帝が病に倒れた時、間人は覚悟を決めたに違いなかった。そして自ら別れを告げるべく密かな決意を固めたに違いなかった。今までの半年、間人は中大兄に皇位の話させなかったが、それも別離の決意が揺らぐのを恐れてであつたのだらうと思うと、その心がいじらしく、哀れであつた。

「間人、飛鳥へ帰ると言うのだらう」

先手を打たれて間人の唇は、今まさに言おうとしていた言葉を失った。代わりに当惑した喘ぎがかすかに洩れた。中大兄は間人の冷えた髪に指を滑り込ませ、静かに愛撫した。優しい、しかしどこか有無を言わさぬ仕種だった。やがて中大兄は肩に伏せていた間人を抱き起こし、濡れて震えているその目を覗き込んだ。

「その必要はない。わたしはまだ即位はせぬ」

間人は大きく目を見張った。黒い瞳の上に驚きや恐れや悲しみや、様々な感情がもつれ合つて駆け抜け、一時のざわめきが過ぎたあとには一点の不安が、くつきりと映し出されていた。

「しばらくは称制（ ）をとるつもりだ」

「でも、兄上……」

ようやく、間人は少しかすれた声を絞った。息が咽の奥で竹笛のような細く鋭い音をたてた。続けて何か言おうとした唇を中大兄の

指がふさいだ。

「今は唐、新羅とのいくさに全力を傾ける時だ。鬼室福信きしつふくしんらが盛り返したと言つても未だ戦況は予断を許さぬ。即位の儀にはそれなりの準備が要る。一刻も早く軍を整え派兵せねばならぬこの時に、そのようなことに人を使うべきではあるまい。このいくさが終わるまで、いや、終わったのちも後の始末が多々あるうから、少なくとも数年の間は即位の儀を行うつもりはない。間人、これは皇太子中大兄の言だ。この儀に関してそなたが異を唱えることは許さぬ」

見開かれたまま止まっていた間人の目が、蝶のように激しく瞬いた。帝より詔みことのりを賜る時のように間人はこうべを垂れた。

「何事も、兄上のお言葉に従いますわ」

間人の目から初めて涙の粒がこぼれ、窓框にぼつりと落ちた。

第三章 女帝薨去（二）（後書き）

先帝崩御後、主に皇太子または皇后が即位の式を挙げないまま
政務を執ること

第三章 女帝薨去（三）

* * * *

寢息をたてる間人を腕の中に抱いて、中大兄は枕辺に灯したままの灯明を、眺めるともなく眺めていた。窓の外には草木のざわめきが低く聞こえた。どこからか隙間風が入っていると見え、おもてに葉叢がざわめくのに合わせて、灯明の炎もゆっくりと身を揺らした。月は今、吹き流された雲にすっかり覆い隠されているだろうと、そんなことを中大兄はふと考えた。

横たわる間人の面輪には火影が琥珀色に射し、そして時折影の薄いゆらめきが通り過ぎた。涙の跡こそ目元にはとどまっていたが、そこには先程窓辺に立っていた時にみなぎっていた緊張の色はもはやなく、無防備な安らぎだけが漂っていた。

中大兄は間人の手を取った。八年前の初夜を思い出し、二つの手を握り合わせて指を絡めた。爪の形、節のしわ、型で押したように生き写しの、二つの手である。血の絆の証であるその部分に、中大兄は唇を寄せた。爪の密やかな冷たさが触れた。

一つの血と愛と罪とを分かち合って来た、中大兄と間人であった。光も闇も、幸福も恐れも、飽満も寂寞も、心に去来するありとあらゆるものを、二人はかばい合って共に味わって来たのだった。いつかは別れねばならぬ、その忍びない痛みゆえに、二人は己の全てを傾けて絆を固く深く結び合わせて来たのであったが、その一途さはいつしか、通常の兄妹よりも、夫婦よりも、遙かに密な、堅牢な抱合を二人の胸の内に築き上げてしまっていた。皇位に就くべき時が来たらずしかるべき決断をすると、かつて鎌足に誓った自身の言

葉を中大兄は忘れたわけではなかった。がしかし、二人の心はいつか境目を失って、二つながら一つの心であった。二人の人生は寄り添う木の根の如くに、互いの中に深々と食い入っていた。二人の間に張りめぐらされた抱合を解く術はもはや、中大兄といえども知らなかった。

夜の寒さが深まると共に、右腿の古傷が静かに疼いた。亡き父帝の誄をつとめたときの傷だった。誄とは殯で行われる儀礼で、死者の、生前の徳を称える文言を読み上げ、自らの体を刃物で傷つけて悲しみを表わすのである。

父帝が薨去した時、中大兄はまだ十六だった。当時、皇位継承の候補者としては、中大兄の異母兄である古人大兄皇子と、もう一人、厩戸皇子の嫡男で父帝即位の際には皇位を争った、山背大兄皇子が有力視されていた。が、それらの有力者を差し置いて、まだ少年の中大兄が誄をつとめたのは、皇后である母の命によるものだった。帝の誄は重責を伴う大役である。母は、夫の殯を利用して古人大兄や山背大兄だけでなく、自らの息子もまた、皇位を継ぐにふさわしい器量を備えているのだと、宮中に認めさせようとしたのだった。そして中大兄は、その母の期待に応えた。

誄をつとめたその時以来、中大兄の中にも皇位継承は明確な目標として強く刻み込まれた。それは望みではなかった。信念と言ふべきものであった。山背大兄が蘇我本宗家と対立を深め、身が危うくなった時、刺客の一団が斑鳩に走るのを見て見ぬ振りし、見殺しにしたのはそのためだった。そして異母兄古人大兄を帝に立てようとした蘇我鞍作臣を暗殺し、返す刀で古人大兄までもを亡きものにしたのは、更に有間を罠に陥れ、処刑したのは、全て、自らが皇位に就くという、その信念のためであったのだが。

皇位は大海人に継がせ、間人と添い遂げる道もある。

がしかし、いつの頃からか中大兄の心にはそんな思いが、浮かんでは消え消えては浮かびを繰り返しつつ、次第に枝を広げていた。

斉明四年（六五八）に左大臣巨勢徳太^{こせのとくた}が没して以来、その空隙^{くうげき}を埋めて来たのが大海人であった。皇族が大臣となる慣例がないために冠位はなかったが、しかし左大臣と同等の待遇を与えられ、鎌足共々片腕として中大兄を補佐して来たその政の手腕や武徳の優れていることは既に朝廷には周知であった。加えて、その人柄ゆえの人望も、大海人には厚かった。

『称制をとる間にしかるべき体制を整えることが出来たら、あるいは……』

腕の中で間人が身じろぎして、思考は遮られた。目覚めたのかと思ったがそうではなく、ただ口の中で何事か小さくつぶやいて、間人は再び、中大兄の胸に顔を埋めた。枕辺の灯明を引き寄せ、中大兄は炎を吹き消した。

年が明けて一月、中大兄は筑紫長津宮^{ながつのみや}で群臣を前に詔し、唐、新羅とのいくさを理由に、即位の儀は行わず称制をとることを告げた。鎌足は何も言わなかった。

* * * *

五月。遠征軍の編成がようやく完了し、軍船百七十艘が筑紫の海に浮かんだ。船団は阿曇比羅夫連^{あつみのひらむらじ}を將軍に海を渡り、別働隊を率いて先に百済に入っていた扶余豊璋^{ふよほうしょう}、そして將軍鬼室福信^{きしつふくしん}らと合流した。百済、倭国両軍の見守る中、豊璋の百済王即位の儀が行われた。

全軍の士気は大いに上がったのであったが、しかしその陰で、百済の王朝には不吉な雲が兆^{きざ}しつづつあった。王、豊璋と將軍鬼室福信との間に対立が生まれていたのである。

王家の者とはいえ三十年もの間異国にいた豊璋と、義勇軍を率いて敵を駆逐し民の辛苦を救った鬼室福信とでは、その人望に差異が生ずるのは無理からぬことであつた。鬼室福信もそれを察し、事あるごとに豊璋を立てていたのであったが、力ある者同士の対立はあらずから周囲を巻き込んでのつぴきならぬ方向へと二人を押し流し、翌年の六月に至つて、豊璋が謀反の罪をもつて鬼室福信を捕え、これを処刑するという最悪の事態に帰着した。

猛將、鬼室福信の処刑は唐、新羅軍にとつては吉報であつた。そこに百済の戦力の低下と、王朝内の分裂を看破した新羅の文武王^{ぶんぶおう}は、七月、唐軍と共に進軍して百済軍の本城、周留城^{しゅうりゅう}を囲み、また唐の水軍は錦江の川口、白村江に陣を敷いた。

八月二十七日、倭国の水軍が白村江に到着し、二十七日、二十八日の両日、唐水軍との間に合戦が繰り広げられた。血気にはやり闇雲に唐の堅陣へ攻めかかった倭軍を、唐軍は左右より囲んで挟み撃ち、倭軍はたちまち混乱に陥つた。数多くの兵が矢や槍に突かれて水中に落ち、兵の血の色を溶かし燃え落ちる舟の炎の色を映した白村江の水は鮮紅に染まつた。

九月七日、周留城は陥落した。扶余豊璋は近習数名と共に高句麗へ逃れた。豊璋の息子、忠勝、忠志は降伏し、ここに百済の命運はついた。城内では敵の手に捕らえられることを恐れた女官たちが城を逃れて次々と川に身を投じ、川岸は若い女人たちの目にも鮮やかな屍で埋まつた。

白村江での大敗はすぐさま、筑紫の中大兄のもとにもたらされた。水軍が壊滅的打撃を受けたとの報に、中大兄は愕然として色を失ったが

「全軍を撤収する」

眉を上げ即座に命を下した。

「弓^{てねさし}礼城に退いている軍勢、及び百済各地に布陣中の軍を集め、速やかに引き上げさせるのだ。また百済の王朝、民の中に国を逃れることを望む者があらば、その者らも皆共々に船に乗せよ」

近習に命じ、中大兄はくびすを返した。敗北に肩を落としている暇はなかった。朝廷に対し巻き起こるであろう批判の声にどう対処すべきか、方策を直ちに考えねばならなかった。彼は九州沿岸の防御を固めたのち、急ぎ飛鳥へ帰京した。

（第三章・了）

第四章 永訣（一）

百濟遠征の失敗に対する批判は厳しかった。派遣した兵の数だけでも三万二千にのぼり、その他租税、労役の形で徴収も含めると、人々が強いられた負担は文字通り膨大であった。しかしそればかりではない。百濟征服の余勢を駆った唐が攻め寄せる危険が生じた。民の間からはもちろん、朝廷内にも中大兄への糾弾が噴き出し、一つ間違えば朝廷の内部分裂すら招きかねない非常な苦境に、中大兄は立たされた。

「兄上、これ以上、皇位を空位のままにしておくのは危険です」

大海人は言った。

「民の動揺は敗戦への不満によるものばかりではなく、国を束ねる帝がおわさぬという不安によるものも大きいと思われます。このように国が危うき時に皇位を空けては、動揺は広がるばかりでございましょう。兄上にも存念はありましようが、そこを曲げて何卒、即位の儀を」

姉、間人のことにはさすがに触れなかったが、大海人はそう言って強く即位を促した。しかし中大兄はうべなわず、代わりに政治改革の法令を宣布する考えのあることを語った。

その内容は次のとおりであった。

第一に冠位をより細かく分け、官職、官人を増やすこと。

次に各氏族の氏上（^{うじがみ}）（１）の地位を朝廷が保証すること。これは

氏上に後ろ楯を与えて氏族統制の強化をはかったものであり、また氏上は朝廷に出仕して官人となるのが慣例であったから、第一の法令と共に、内政の充実をも意図した方策だった。

最後に有力氏族が保有する部民をを安堵すること。乙巳の変直後の詔みことのりによって、民は全て帝に属することとなり、氏族が部民を有することは禁じられたのだったが、しかしそれは徹底されたものではなく、尚多くの私有部民が存在した。それら部民を朝廷が改めて氏族に賜るという形で所有を認めたものであり、いわば財産を保障し氏族の不満の柔化をはかったものだった。

「そして大海人、この法令はそなたが宣布するのだ」

中大兄は命じた。本来ならば法令は中大兄が詔すべきものである。それを大海人が代行するとは、すなわち大海人の待遇を左大臣から更に引き上げることであり、そして中大兄の後継者と目するということであった。

この時代、有力の豪族といえども自力で朝廷を覆す力は持たず、叛乱はもっぱら皇位継承権を有する皇族を奉じるという形でのみ、起こった。中大兄を除けば継承権を持つ者は大海人一人である。中大兄は大海人との結びつきを緊密にし、また同時にそれを広く喧伝して、反体制勢力の叛乱を未然に防ぐ手立てとしたのであった。

敗戦の翌年、この法令は大海人によって宣布され、豪族らの不満を鎮めるのに一応の成果を上げた。豪族の地位や財産を安堵するのが朝廷である以上、朝廷の権威が弱まれば豪族の地位もまた危うくなる。朝廷を構成する豪族は、何よりも自分自身のために、協力の姿勢を示さざるを得なかった。

豪族の不満をとりあえず收拾すると、中大兄は急ぎ、唐の侵攻を想定した防衛策に着手した。唐が海を渡って攻め寄せるならば、まさに百済遠征の際に水軍の本営となった筑紫の那大津^{なのつ}が、地形から見ても敵の上陸地点となる。そのため、まずは対馬、壱岐、筑紫の三カ所に防人の軍勢を置いた。先の百済遠征で全国から徴集された兵のうち、西国の者は船の扱いに長けて^たいるために遠征軍として百済に派兵されたが、海に慣れぬ東国の兵は九州にて帝の親衛軍とされた。その軍勢は百済の役終結のちもなお、防衛軍として九州に留め置かれていたのだが、それを、辺境を守備する防人として改めて編制し、各要所に配置したのだった。また各地の山頂^{ほう}には烽（2）が据えられ、変事を九州から大和の都まで伝える機関が整えられた。

筑紫大宰府には防御の砦が築かれた。大宰府は「遠^との朝廷^{みかど}」と呼ばれる朝廷の出先機関で、九州統治の重要拠点であるのだが、防御ということに関しては周囲の地形ゆえにいかにも手薄であった。近郊を流れる御笠川が、前述の那大津へ向かってまっすぐに注ぎ、しかも川に沿って平野が細長く伸びているのである。敵が侵入したならば間違いないこの平坦部が、大宰府への侵攻を許す通路となる。それを阻むため、中大兄は大宰府の北にそびえる大野山の丘陵端と、西方の丘陵地を結ぶ形で、平野を横切る全長半里にも及ぶ長大な土塁を築かせた。

これらの大がかりな普請は無論、外征に疲れ果てた民により一層の苦痛を強いるものであったが、中大兄はそうした不満の声を力づくで押しつぶし、国防策を進めた。

間人が病に倒れたのは、そのように朝廷が内部分裂と外敵の脅威を乗り越えようと必死にもがいていた、そのさなかであった。

* * * *

ある夜、激しく咳き込む音に、中大兄は目を覚まされた。気づけば傍らに寝ているはずの間人の姿が見えず、帷とばりの向こうにひどく苦しげな咳が聞こえた。中大兄は飛び起きた。帷をかかけると、部屋の隅にひとかたまりに崩折れた白い影が目に見え込んだ。

「間人、如何した」

驚いて中大兄は駆け寄った。体の下に腕を差し入れ抱き起こすと、間人は肩を震わせて一段と激しく咳き込み出した。途方に暮れながらも、中大兄は苦しむ間人を抱きかかえ背をさすった。

しばらくしてようやく、発作は鎮まった。

「水を飲むか」

間人はわずかに頷いて、椀に汲んだ水をほんの二口ばかり、咽に流し込んだ。抱き上げて、中大兄は間人を臥所に運んだ。汗に濡れてぐったりと横たわった姿を、灯明の火が容赦なく照らし出した。

「いつから悪かったのだ」

様子が多少落ち着くのを待つて中大兄は尋ねた。この半年ばかりの間、多忙のゆえに中大兄は間人の体にほとんど注意を払っていなかった。それが悔やまれるばかりに、口調はつい、詰問するような厳しいものになった。

「病などではないの。心配なさないで」

と間人は、血の気の引いた唇につくったような笑みを浮かべた。

「この幾日かで急に寒くなったでしょう。そのせいで少し調子を崩しただけですわ。心配なさらないで」

そう答えたものの、しかし間人は起き上がって寝衣しんいを替える力もないようだった。中大兄は殿居とのいの者に布と新しい寝衣を命じた。手ずから汗を拭い着替えをさせてやったが、絞るばかりに汗をかいているにも拘らず、触れてみると肌は氷のように冷たかった。

朝を待ち、中大兄は薬師を呼んだ。白髪しらげの薬師は間人の脈を取り、問診など行つて丹念に体を診たあと、しばらくの安静を言い置いた。様子が気に懸かつてならず、中大兄は暇を見つけては部屋を見舞つた。

「お忙しい時なのに。わたくしのことまで気に懸けられてはお体に障りますわ」

足繁く訪う中大兄を間人は逆に氣遣つて諫めた。

「国の全ては兄上の肩にかかっていることをお忘れにならないで。兄上が倒れては、この国も共々に倒れてしまうのですよ。どうか御自身のお体を第一に考えて。わたくしは大丈夫ですから」

「懸念は無用だ。むしろそなたの様子が分からぬ方が、よほどわたしにはこたえるのだよ」

間人が諫めるたび、中大兄は額の上にもつれた髪をかき上げてやりながら、そう答えるのだった。

数日の安静ののち、間人は床を離れた。久し振りに夜具を片づけさせ、白色の寝衣を色物の袍に着替え、間人は冬の朝日のようなすつきりした笑みをおもてに浮かべたのだったが、しかしあの夜襲った発作は、ちょうど刃の一閃が醜い傷痕を残すように、間人の体に不吉な暗い影を焼き付けていた。

第四章 永訣（一）（後書き）

- 1 氏族の族長
- 2 狼煙

第四章 永訣（二）

ある時中大兄が部屋を訪れると、間人は身じまいをして出かけようとしているところだった。足慣らしに近くの村まで歩いてみるつもりだといった。

「急に無理をかけてはならぬぞ」

「大丈夫、少しでも疲れたと思ったらすぐ引き返して参りますわ」

中大兄と女官と護衛の兵とにつき添われて間人は門を出たが、幾らも歩かぬうちに足どりが重くなり、とうとう道端の樹木の根方に座り込んでしまった。中大兄は兵に、輿こしを運んで来るよう命じた。

「ごめんなさい」

余計な手を煩わづわせたの間人はうなだれた。地面を見つめる目が少しうるんでいた。頬も心持ち赤いように思われた。手を取ってみると思ったとおり、掌が変に熱かった。

「また、熱が出ていますか」

間人はぼんやりした目をしながら、自らの頬の熱さを確かめるように掌を押しあてた。

「下がらないのです」

心細そうにつぶやいた。座っている木の幹に木蔭が赤々と紅葉した葉を茂らせて這っていた。間人のつぶやきを聞き流すような振り

をして中大兄は蔦の葉をむしり間人の頬にあてた。

「頬が火照るだろう。あてているといい」

間人はようやく、弱々しいながらも口元に笑みを取り戻した。火のように赤い、そしてひんやりと冷えた木蔦の葉叢に頭をもたせ

「心地良うございますわ」

小さく言った。

「輿が来るまでそうして休んでおれ。そなたの苦手な虫も、もうおるまい」

何でもなさそうに言う中大兄に間人は黙って頷き、そして二人の周りは草のさざめきだけとなった。寒々と遠のいた空の青さが頭上を流れた。その、何か秋の頃よりも一層澄んで見える空を負って、遙か遠くには畝傍山の稜線が現れていた。力強く盛り上がった山体の裾には、紅葉の残り火がまだわずかに窺えた。遠くの田に人影が幾つか動いていた。落穂を拾う農夫のようだったが、手を動かしながら、あぜ道に現れた高貴な装いの一団を、時々物珍しそうに盗み見ていた。また風が立ち、そんなもろもろの景色を眺める二人の周囲に、草の音を沸き立たせた。

「兄上」

と、風の中で間人が急に、ぽつりと呼んだ。

「わたくしね、しばらく飛鳥を離れて静養しようかと考えておりますの」

「飛鳥を離れる？」

思いもかけぬ言葉に不意を突かれ振り向いた中大兄に、間人は取ってつけたように頷いた。

「どこか暖かな土地、例えば昔母上のお供をして参った紀温湯でございませうとか、そういう所でこの冬を過ごせば、体もすぐ治るように思いますわ。唐の使者のことがございますから、今すぐにはありませんけれど……」

この時、旧百済に駐留する唐軍の將軍、劉仁願りゅうじんがんの使者として、郭務宗くむそう（ ）という百済人が来訪していた。白村江の大敗で百済が滅んだあと、唐は百済の義慈王ぎじおうの息子、扶余隆を熊津都督に任じて百済遺民の統治にあたらせ、かつ、新羅との間に和睦を誓わせた。今回の郭務宗来訪の目的は、唐の行った処置について倭国の了承を得ることであり、朝廷は最中対応に追われていたのである。宮中が立て込んでいる中であるため、今はとりあえず行き先だけ決めておいて、この件が片づいたら出発しようと思っていると間人は言った。

「しかし何故急に転地など思いついたのだ」

「急にはありませんわ。少し前から折々考えていたの。飛鳥の冬は寒うございますから。今のわたくしの体にはよろしくないと思いますの」

「そなたは幼い頃より寒さが苦手であつたな。だが、理由はそれだけか」

「他に何がありましたよう」

「病の身でそばにおつてはわたしの迷惑になるなどと、余計なことを案じておるのではあるまいな」

「まあ」

間人は少し驚いた様子を見せ、それから笑つてかぶりを振つたが、しかしその驚き方は大仰で、そして見せた笑みもどこか芝居がかつていた。それきり、間人はこの話を一方的に打ち切つて、また木蔭の葉の中にもたれ込んだ。山吹色の袍ほうの上に白い手を重ね、ほつと目を閉じたが、疲れのためというよりも、こちらにこれ以上、あれこれと詮索させぬためであろうと中大兄は思った。

『どうしたものか』

間人の体を思えば、暖かな地での静養は決して悪い案ではなかった。が、それが純粹に自分自身をいたわつてのことではなく、あくまで足手まといにならぬために言い出したこととなると、そのような心持ちでいる間人を、たとえ冬の間だけでも他所へひとりで行かせるとするのは、どうしても不安があつた。

『もつと何もかも、わたしに甘えきつてくれればよいものを』

それが出来ぬ、間人であつた。間人が愛を受けたために、中大兄は未だ皇位に就かずにいる。自分の存在が中大兄の人生を狂わせたのではという後ろ暗さが、間人にそうさせるのだつた。

赤々と燃える木蔭に埋もれながらじつと目を閉じる間人を見つめ、中大兄は愛しいような、悲しいような、ある種の苦しさに胸を突かれた。元々白かった肌は病を得てから更に白さを増し、今は固く閉

ざされた、黒々と鋭いまつ毛とあいまって、面輪は脆い陶人形のようであつた。

* * * *

十月四日、中大兄は郭務宗ら唐の使者を宮中に招き、饗応した。唐の申し入れを、中大兄は受諾したのだった。半島の勢力図から締め出されることを無念がる声も朝廷内にはあつた。しかし百済王族の扶余隆を熊津都督に据えたことにせよ、新羅に、その扶余隆と和睦を誓わせたことにせよ、唐の半島経営が難航しているのは確かだった。

倭国には扶余隆の弟扶余勇が亡命している。唐が今回使者を遣わして来たのは、倭国が再び扶余勇を押し立て旧百済の回復をはかることを牽制するためであつたが、しかし翻つて言えば、こちらが半島への野心を顕さぬ限り、少なくとも今のところは唐の侵攻もないと考えて間違いはなさそうであつた。これで唐の脅威が完全に払拭されるわけではないが、今は国の防御をより強固に固めるため、時が必要だった。中大兄はそちらを優先したのである。

ただし郭務宗のたずさえた書状については、これはあくまで劉仁願よりの牒書ちやうしょであるとして受け取らず、更なる安全の確約のため、高宗よりの国書を求めた。

ひと通りの交渉は無事に済み、郭務宗ら使者の一行は帰路についた。

* * * *

それから数日後の夜半過ぎ。人の慌ただしく行き交う気配に、中

大兄は眠りを破られた。廊下を幾人もの足音が行き来している。押し殺した声で何かしきりと言いつわっているのも、遠いさざなみのように耳に入った。耳を澄ますともなく澄ますうち、中大兄はつと胸騒ぎを覚え床の上に身を起こした。隣にまどろむ妃を揺り起こすのももどかしく、手ずから衣を身につけ急ぎ部屋を出た。

石だたみを蹴立てて廊下を渡って行くと、向こうに灯明の火が漁火のようにちらちらと揺れ、女官たちのぼんやりとした影絵が浮き上がった。影がせわしく出入りしているのは、まさしく間人の部屋であつた。

中大兄の姿に気づいた女たちは一瞬、まるで罪を咎められた者のようにその場に凍りついた。

「何があつた」

「咳き込まれまして」

一番近くにいた若い女官が、震え声でそれだけを言った。そこへ、間人のそばに仕えるうちで最も年のいった女官が部屋から出て来た。中大兄に気づき、居並んだ女官たちをかき分けて進み出た。

「咳の発作を起こされました。それで」

その女官は病人を気遣つて、陰鬱なほどに声をひそめた。

「わずかでございますが、血の痰を吐かれました」

そう言つて、手にした素焼きの平鉢を傾けて見せた。鉢のざらついた底に、手燭の灯に照らされて親指ほどの血の塊が一片、色づい

た木蔦そっくりの鮮やかさで貼りついてあった。

「薬師は」

「もう、呼んでございます」

女官の押しとどめるような目を振り切って、中大兄は部屋に入った。帷の中に間人は、身じろぎもせず横たわっていた。薄明かりの下でも分かるほどに顔からは血が失われ、しかし中大兄が覗き込むと、唇が咄嗟に何か言おうとかなさかな痙攣を見せた。中大兄は唇に指をあてて制し、夜具の中で手を握ってやった。薬師は枕辺に座り、脈を見ながら、時折低い声で周りに何事か言いつけた。女官たちは言われるままに部屋を暖める火を運び、湯を沸かし、よく訓練された兵のように、てきぱきと機械的に動き回った。

第四章 永訣（二）（後書き）

郭務宗の「宗」は正しくは「りっしんべん＋宗」

第四章 永訣（三）

夜明け近くなつて病人の容体はとりあえず落ち着いた。薬師はようやく枕元から腰を上げた。

「太皇太后様（ 1 ）は、虚勞（ 2 ）を患つておられます」

先に立つて廊下に出ると、薬師はそう、中大兄に告げた。早暁の寒さの中で、息が、かしらに置いた白髪のように白く凍てつき漂った。黙つて、中大兄は足元に視線を落とした。廊下に敷かれた石だたみもまた、視線の先で一面に凍つていた。

虚勞という、その半ば死の宣告にも等しい名を、中大兄の体はしばらく理解し得なかった。ちょうどあの素焼きの鉢に貼りついていた血の痰のように、ただ音の塊となつて耳の奥に引っかかっているばかりで、その意味するところは、心にも体にも容易に漉し出されては来なかった。

「それは、確かか」

しばらくあつて、全身の血が砂になつてざらつくような感覚を引きずりながら、中大兄は低く声を発した。一瞬、薬師は言いよどんだ。中大兄の心中を察し何事か樂觀的要素を述べようとしたのだったが、しかし結局何も見つからなかったと見え、は、と無機的な答えを返した。中大兄は小さく首を振った。咽の奥から苦しげなため息が洩れた。この、両の目に智の光をたたえた老薬師への中大兄の信頼は厚かった。そばに仕えて来た長い年月の間、見立てに誤りがあつたことはなく、それは中大兄自身が誰よりよく知っていた。

「薬はないのか。どれ程貴重なものでも構わぬ」

「残念ながら、咳や痰を抑える薬はございますが、しかし根本から治す薬というものはございませぬ。無理をなさらず、滋養を摂られ、出来る限り、お体をいたわられることです。太皇太后様のお体が力を取り戻されることこそが、この病の薬でございます」

薬師は、まるでそれが自身の手落ちであるかのように、深いしわの中にまぶたを伏せた。

「間人は、自分の病のことを存じておるのか」

「いや、わたくしの口からは何も申し上げてはおりませぬ。ですが」

と、薬師は痛ましい目を向け、太皇太后様ご自身は以前よりうすうす病に感じておられたように思われますと言った。

「やはりそうであったのか。間人め。病ではないなどと、たわけた嘘を」

中大兄は吐き捨てた。が、その声音はおのずから裂くような悲痛の響きを帯び、傍らの薬師ははつと、と胸を衝かれる思いで中大兄の表情を窺った。が、中大兄は内庭の方へくると向き直り、下がるよう、鷹揚に手を振ったきりだった。

深くこうべを垂れ、薬師の足音が遠ざかって行った。固く凍りついた石だたみから沈黙が湧き上がり中大兄を捕えた。静寂に塞がれた耳に、薬師と交わした言葉が繰り返し、重苦しく去来した。

気がつけば空はいつしか明るくなっていた。しかし周囲の木々が

日の光を遮るために内庭は未だ明け方の薄闇に沈んでいた。顎を上げ、中大兄は蒼い薄闇の底から空を仰いだ。赤地に金糸を織り込んだ鮮やかな朝焼けが射し、その向こうに白瑠璃のような透明な青空が伸びていた。朝焼けの色をへりに滲ませて、雲が薄く流れた。

まばゆい彩りを惜しみなく目に映しながら、しかし中大兄はもはやそこに、自らとの如何なる繋がりも見出すことは出来なかった。この世の全てに中大兄は見捨てられていた。彼は今この世の孤児であつた。水底の泥の中で暖かな空を乞う死者の心とはこのようであらうかと、ふとそんな思いが立ち尽くす胸をよぎつた。

* * * *

長い一日が終わつた。夕刻、中大兄は間人の様子を見舞つた。心身の安静のため臥所ふしどは明かりが落とされ、そのひどく暗い中に、間人は薄い影になって横たわっていた。中大兄の姿を認めると、黙つて、漂うような笑みを、口元に浮かべた。静かに、中大兄は枕辺に座つた。指先を触れると額が少し熱かつた。熱のこもつた額に中大兄は掌をあてた。熱とは言つても微熱であり、布を絞るよりも人肌をあてる方が間人には心地良いのだった。しかし熱よりも、このひと月ばかりの間に額や頬が急に瘦せたように見えることの方が、むしろ中大兄には気懸りであつた。

「わたくし、瘦せたでしょう」

見つめる中大兄の目を察して、間人が言つた。声が小さかつた。

「そうだな。少し瘦せたかもしれぬな」

間人の言つたことはさらりと流しておいて、中大兄は逆に、飯は

ちゃんと食べているかと訊いた。

「食べるようにしてはおりますけれど……。でもあまり食べたくないのです」

「多少は無理して食わねばならぬ。体に力を取り戻すことが一番の薬だと、薬師が申しておったからな」

間人は素直に頷いた。しばらく、中大兄が手で額や頬を冷やすのをぼんやりと眺めていたが、やがて軽い吐息と共に目を閉じた。手の下で眉間の辺りが二、三度、痙攣した。呼吸が苦しいのかと見守っていると、間人の目が開いた。

「兄上」

と、遠くから聞こえて来るような声で間人が呼んだ。暗く静まり返った瞳をじっと上げ、口を開いた。

「お願いがございますの。わたくしはもう、長くはないように思いますわ。ですから、どうかわたくしが死ぬまで、ここにおいでにならないで下さいませ」

「間人！」

間人の口からいきなり吐き出された死という言葉は、氷の刃となつて中大兄の体をえぐった。目には見えない傷口から血の代わりに激しい怒りが脈打って溢れ出た。間人は枕の上で頭をねじり顔をそむけたが、中大兄は許さず、体をいたわらねばならぬことも半ば忘れて、両肩をわし掴みにして無理矢理自分の方を向かせた。

「死ぬなどと、そのような事を何故わたしに向かつて言えるのだ。わたしはそなたがこの世に生まれたその日から、父母が慈しむより深く、そなたを愛しんで来たのだぞ。自らの命以上に、そなたを大切に思うて来たのだぞ。そなたはわたしの生そのものだ。それを知っていたながら、何故そのような事を口に出来るのだ」

背を焼く憤りに任せ、中大兄は厳しい口調で責めた。間人は頑かたくなに唇を引き結んで眉を上げた。目を大きく見開き、まるで挑みかけるようなまなざしを向けた。

「兄上にだけは、お見せしたくないのです」

切り裂くように言った。目を見張り、間人は手を咽元にぐつとあてがった。

「体を病んでから、おもての物音が、耳にしきりに聞こえるのです」

震える声で言った。

「臥所にこうしてひとりきりで横になっておりますと、雨、風の音、遠く廊下に行く人の足音、庭の木の葉がひっそりと落ちる音まで、まるですぐ耳元で響いたようにはっきりと聞こえるのです。不思議に思ううち、わたくしふと気づきましたの。これは、わたくしが死んでひとりお墓に横たわった時に聞く音に違いないと……。そうですわ。石の中にいるのだから、雨音などはきつとうるさいほどに響くでしょう？　そして、もう体を失って魂だけになっているのだから、遠くの音も近くの音と同じように、はっきりと聞こえるでしょう？　兄上、わたくしの身は、この先病みやつれて行くばかりですわ。わたくしの手を、御覧になって」

間人は手を中大兄の目の前に突き出した。もたげた手は頬以上に

やつれ、肉が落ちたために節が立ち、しわすら現れて、年よりもずっと老け込んでいた。

「わたくしは今も、娘の頃と変わらぬ心で兄上をお慕いしております。その兄上にだけは、醜く変わり果てた姿を見せたくはないの。分かって下さいませ、どうか……」

心根穏やかな間人が見せた思いがけない激しさと、その激しさが語った少女のようないじらしさに心打たれて、中大兄は咄嗟に返す言葉を失った。もたげた手がぱたりと落ちて、間人はそのまま両手で顔を覆った。掌の下に息が震えた。

手を伸べて中大兄は間人を抱き起こした。力なく頭を振って拒むのも構わず、顔を覆っている手を無理にどけた。間人は目を固く閉じていた。醜くひきつれた表情に、自らに訪れる運命に対する恐怖が、むごいほど滲んだ。

「間人、我々の絆を望む者などこの世にはいないのだ」

しばらく腕の中に抱きすくめたあと、中大兄は間人の耳元に低く言った。

「如何に真摯に思い合おうとも、この世では我々の契りは穢れた。そしてまた、そなたが後宮にあつてわたしを皇位から遠ざけているという事実は確かに、朝廷紊乱びんらんの元凶にもなり得る。あらゆる意味で抱合ほうごうを望まれぬ我々を守り、味方するのはただお互いのみなのだからもしも、そのわたしたちが自ら互いの手を離そうとすれば、見えぬ力が明日と言わずたった今、否応なく我々を永遠に引き裂いてしまうのだぞ。そなたはそれを本当に望むのか」

腕の中で間人はうなだれた。鼻先に髪が香った。息が咽元に生暖かく触れた。

「この絆を今日まで守って来られたのは、わたしがそなたを離すまいと努めたからだ。だがそれ以上に、そなたがわたしの手を離さずにいてくれたお陰なのだよ。それを忘れてはならぬ。何が辛くとも、わたしのもにいてくれ。自ら離れようなど、誤っても考えてくれるな」

うなだれた顔を持ち上げ中大兄は白い額に頬を押しあてた。額の熱さが肌に沁みた。閉め切った窓の外に音がした。さざれ石を撒くような乾いた音がばらばらとしたと思うと、それはたちまち冷たい冬時雨となつて部屋にのしかかった。急な雨に慌てた女官たちが何事か言い交わしているのが、廊下に行く足音に入り交じった。風に煽られて強さを増した雨足が、窓を打っては頭上を駆け抜けた。

中大兄の胸にもたれて、間人は身を震わせた。間人の耳は土を被せられた石室に打ちつける雨を聞いているのだった。赤土に雨水が沁み込み、石の隙間から滲み出す音、その水が石室の壁や床をしとどにつたう音を、聞いているのだった。黴^{かび}や冷え切った苔の臭いを嗅いでいるのだった。雨音の降り込める薄闇の中に、中大兄は間人の体をしっかりと抱いた。間人の心を支配している恐怖を自らの体に通わせ、全身で、光も射さぬ石室に響く雨の音を聞いた。

草木の葉叢を半刻ほども騒がせて、雨は上がった。間人が身じろぎした。見上げた目が、ふっと微笑んだ。

「兄上がいて下されば、もうどんな音も怖くない」

その面輪には、先程まで血膿のように滲み上がっていた恐怖の色

はもはや見えなかった。

* * * *

就寝前のひと時おもての音を聞いて過ごすのが、中大兄と間人の新しい習慣となった。間人が起きていられる間は、物音がよく聞こえるように窓のそばに寄り添って座り、くたびれると臥所に並んで身を横たえ、二人は身の回りに過ぎて行く音に耳を傾けた。

夜ごと、とりどりの音が、部屋を訪れては去った。風は木の葉をてんでに揺らして潮騒のように沸き立ち、静まったあとには土の湿った臭いや枯葉の暖かな匂いを置いて行った。雨は抑揚を持たない静寧な^{せいねい}声を地表に遙々と広げ、二人の耳を遠く遠くへといざなった。重たく窓を叩いてまわるあらは、静かな夜を殊更に孤独なものにした。

あの日二人を襲った鮮烈な死の影は、移ろいゆく日々の中で次第に薄らぐように思われた。しかしそれは二人のもとを去ったものではなかった。間人は毎日、明け方決まったように激しい咳に見舞われた。そしてそのたび、血の痰を吐いた。死は遠ざかったのではなく、むしろより身近なものになったのであり、そしてそのためにかえって気に留めなくなつたに過ぎないのだった。

ぬるい日常は、人生に降りかかるどんな衝撃も手なづけてしまうのだと、咳き込む間人の背をさすってやりながら、中大兄は思ふのだった。ほんのふた月前までは、間人がこうして病の床に就こうなど考えられぬことであつた。であるのに、今は、間人が病に侵されていることも、そればかりかこうして毎日のように痛ましい血痰を吐くことすら、あたり前の光景になってしまっている。思えば人の死ですらそうだ。亡くした直後は悲しみに心が裂かれるが、日々の

中でその悲嘆は薄れ、その者がいないことが当然のようになる。

一瞬戦慄を覚え、中大兄は背をさすっていた手を止めた。背中の苦しげなわななきが手に伝わった。もしも間人を失ったら。それは耐え難い悲しみであった。がしかし、それ以上に、いつしかその悲しみが癒え、傍らに間人がいないことに心が慣れてしまうというのは、悲しみ以上の恐怖であった。

第四章 永訣（三）（後書き）

- 1 先々代の帝の皇后
- 2 肺結核

第四章 永訣（四）

時に、草木すらも深い眠りに陥ったかと思われるほどに、夜がしんと静まることがあった。そんな雪の夜は、二人もまた語らうのをやめ、臥所に横になって静寂の音に耳を傾けるのだった。傍らに寄り添う間人の体は熱かった。冬が深まるにつれ、熱は少しずつ高くなつて行くように思われた。

「苦しくはないか」

額に手をあてて訊くと、間人は首を振って、火照るだけだと答えた。中大兄は間人をそばへ抱き寄せた。呼吸がまじり合つて、二人の間にぬるくよどんだ。

抱きしめるうちに、夜気に冷えていた中大兄の体は間人の熱に温められ、熱を帯びていた間人の肌は中大兄の体に冷やされて、二人の体温は等しく通い合った。窓の外に布を打つような音が一音、くぐもつて響いた。

「ああ、雪が落ちましたわ」

目を閉じて間人がつぶやいた。それきり、再び世界から音は絶えた。しんと降り積もる静けさの中、中大兄は胸の上に間人の鼓動を聞いた。中大兄は、間人の胸に巢食う病を思わずにはいられなかった。病が、分かち難く結び合ったはずの二人を裂く一本の暗い楔くさびとなる、その不安を思わずにはいられなかった。

中大兄は間人を抱いた腕に力をこめた。互いの胸が貝のようにぴたりと合わさつて、同じ呼吸を刻んだ。あたかも二人の体が同じ

生きものに融合したかに思われて、中大兄は目を閉じた。水面の油膜のように、寄り合ったまま体も魂も一つに溶けてしまえたなら、病は間人だけのものではなく、二人のものになる。もはや如何なる病魔も我々を引き離すことは叶わぬのだと、そんな幻想に中大兄はひと時酔うた。間人はうつすらと目を開け、中大兄を見つめていた。二人の息の音が身をひそめるようにさやかに漂った。

そして、冬が終わりを迎える気配を見せ始めたある朝、咳き込んだ間人は初めて、軽い喀血を見せた。

* * * * *

喀血を繰り返すようになってから、間人の体は目に見えてやつれたようだった。痩せ方が一段と進み、体力が衰えたためにまどろむことが多くなった。頬は今にも透けてしまいそうに白くなった。一方で髪はずつしりと黒みを増し、黒髪に埋もれて仰臥ぎようがしていると、蒼ざめた面輪おもわは夜の海にいつとき浮かんだ泡のようであつた。

宮中の一角では病平癒の祈祷が続けられていた。また中大兄の命により国中から様々の薬も献じられていた。が、それらは皆間人の体を素通りし、祈祷の声も薬湯も何の効も表わさなかった。

枕辺に座り、中大兄は小さく揺れる火影の下に間人の寝顔をいつまでも見つめるのだった。病みやつれたその顔は顎が尖り頬がせいひつ高くなつて、しかし黒いまつ毛に守られて閉ざされたまぶたには、静謐な美しさが漂っていた。そして唇には神さびた静けさが現れ始めていた。間人の体は既に、この穢れた俗世とは異なつた時の中を生きているのかもしれない。そしてその時は、間人がある一つのさだめに向かつて、少しずつ、しかし確実に押し流しつつあるのに違ひなかった。

枕元に髪が乱れて広がっていた。触れてみると、健やかであった頃と変わらぬ匂やかな手触りを、長い髪は指先に伝えて来た。間人が無意識に首をよじらせた。黒髪の陰に水鳥のような細い首が覗いた。頤おとがの下にほくろが見えた。

『このほくろも、もうじき見れなくなるのだな』

ふと思った。白い肌の上にぽつりと置き忘れられた小さなほくろは、明の明星のように寂しかった。耐えきれず、中大兄は両手の中に顔を沈めた。

『間人を愛するべきではなかった』

初めて、切るような悔いが身を絞めつけた。間人の病は、中大兄との破倫はりんの關係に長年悩み続けた、その心痛が招いたものであることは疑う余地はなかった。十二年前、飛鳥への還都を強行したあの時、間人を難波宮に残して行くことは、帝のみならず間人とも袂を分かつことに他ならなかった。中大兄には、それは考えられることではなかった。そして間人もまた自分と同じ思いを抱いている以上後宮から奪い去る以外の、如何なる選択もあり得ないと中大兄は思ったのであったが、

『難波にひとり残されたなら、間人はわたしの裏切りに傷ついたであろう。だがそれとて間人にとってまことの不幸であつたかは分からぬ。叔父上との夫婦仲が悪かつたわけでもない。むしろあのまま皇后として日向を歩ませた方が幸せであつたかもしれぬ。わたしは自らの身勝手な恋情を遂げるために、最も大切な者に辛い目を強いて来たのではあるまいか』

「兄上」

間人の声が小さくした。はっと、中大兄は顔を上げた。いつの間に目を覚ましたのか、間人が床からこちらを見つめていた。

「ああ、目覚めたか」

と、咽から絞り出した声はひどくかすれた。内心の憂いを悟らせまいと、中大兄は口をつぐんだ。間人もまた中大兄を見上げたきり何も言わなかった。不自然な沈黙が二人の間にこもった。中大兄は軽く咳をした。間人の額に手をあて、それから脈を見た。間人は何か気遣わしげな目で中大兄のする様を追っていた。その澄んだ視線が中大兄には心苦しかった。風に、窓ががたがたと不安な音をたてた。

「間人」

とうとう気づまりな沈黙に負けて、中大兄は口を開いた。間人の目がちらと動いた。

「間人そなたは、わたしと共に生きて幸せであつたか」

行き場を失つたような声が、問うた。間人はまぶたを押し上げじつと目を開いた。沈黙があつた。

「兄上は、わたくしのことを悔いていらつしやるのですね」

「悔いているのではない」

言下に、中大兄は間人の言葉を打ち消した。

「わたし自身は悔いも、恥じもせぬ。だが、夫として、兄として、わたしは考えずにはおられぬ。そなたにとってまことに幸せであつたのは、果たしていずれの道であつただろう。そなたはわたしとは違う。事を好まぬ、優しき心根の女だ。後ろ暗さを負つて日陰を歩むなどそなたの生き方ではない。むしろ帝と共に」

「何故そのようなことをおっしゃるの」

叫ぶように間人が遮つた。透きとおつた瞳の中に傷ついた色があつた。その瞳をまつすぐ向けながら、間人は肘に力をこめて床の上に身を起こした。

「悔いておられるではありませんか。兄上、兄上の幸せはそのままわたくしの幸せではないのですか。わたくしたちの心は如何なる時も一つと思つておりましたわ。何故それをお疑いになるの？ そのような悲しいお顔をなさるほどに、わたくしは不幸せに見えるのですか」

「そうではない、逆なのだ。幸せだと申してくれたその言葉を、わたしはあまりに無垢に信じ過ぎた。こうして病に侵されるまで、わたしはそなたの不幸に気づいてやれなかつた」

「いいえ、いいえ、違います。兄上は間違つておられます」

熱のために、間人の唇には熾火おひのように赤々と血が射した。

「この恋をやるせなく思つたこともございます。密かに兄上をお恨み申上げたことも本当はございました。でも、わたくしの命を明るく照らして下さつたのは、他ならぬ兄上なのですよ」

間人は小さく咳き込んだ。何度か続けざまに咳き込み、咳き込むはずみに痛みが来たのか、そのまま胸を押さえた。これ以上喋らせでは良くないと、中大兄は間人の体を支えて寝かしつけた。胸に手をあて間人はしばらくじつと目を閉じていたが、再び、中大兄が目で止めるのも構わず口を開いた。

「もし自ら手を離そうとすればわたくしたちの絆は目の前で失われてしまうと、兄上は諫めて下さったではありませんか。兄上、あの時兄上は、絆を守って来られたのはわたくしが手を離さずにいたおかげだと、こう申されました。でもそれはむしろわたくしの言葉です。兄上はわたくしを導く日でございました。天から日が失われることがないように、兄上のお心も決して変わることがないと知っておりましたゆえ、わたくしは何惑うことなく兄上のあとを追って参りました。そして日の恵みで地に花が満ちるように、兄上のためにわたくしの人生は実りあるものとなりました。わたくしの人生は日陰ではありませんわ。常に、日の光と共にあったのですもの。だから悔いしないで下さいませ、どのようなことも……」

間人はふいと顔をそむけた。顎の下にほくろが覗いた。間人は目を閉じ、じつと目頭を指先で押さえているようであった。中大兄は何かのしるしであるようなそのほくろに目を落としていたが、

「すまなかった」

ようやく、かすれた声で言った。

第四章 永訣（五）

* * * *

梅の花を見に行きたいと、間人は中大兄に頼んだ。宮殿から数町ほど離れた山裾の野辺に、二本の白梅の古木があるのだった。丈低い、茎の固い下草しか生えぬ荒れ野の一隅にまるで迷い込んだように、二本の梅は添い合って立っていた。植物が未だ冬枯れから覚めぬ早春、見る者としてない荒れ野の中に目に痛いばかりの白淨の花をほころばせる、その寂しい美しさを間人はこよなく愛していたのである。

宮殿から出るのですら、今の間人には無謀であつた。が、中大兄は何も言わず、人を遣わして様子を見に行かせた。花は枝の根元にちらほらと見えるばかりでまだ見頃には遠かった。中大兄はその者に、荒れ野に通つて日々、花の様子を知らせるよう命じた。十日ばかりのち梅の木は満開を迎え、中大兄は宮中の主だった者を引き連れ間人を伴つて、荒れ野に花見の宴を開いた。

空は曇っていたが、渡る風はもう肌に寒くはなかった。二本の老いた花樹は、枝々に輝くような白妙を纏い、間人と客人を迎えた。人々は花を囲んだ。中大兄は太い幹の根方に毛皮を敷かせ間人と座つた。

宴が始まつた。酒がふるまわれ、肴がふるまわれた。女たちが酒瓶を抱えて行き来した。楽師が琴を奏でた。琴音に合わせて歌が吟じられ、舞が舞われた。中大兄は前もつて皆に、今日は冠位にとらわれず、銘々出来る限り華やかな春らしい色の衣を着るように命じていた。人々が梅木の下で飲み騒ぐさまは、あたかも花という花が

梅花の美しさを慕って地面の下から一斉に萌え出たかの如く、遠目にはのぞまれた。

「でも、花の中に獣が一匹紛れ込んでおりますね」

草色の袍の上に金色のテンの毛皮をすっぽりと纏った間人は、自らの姿を揶揄した。

「むしろ山の神であろうよ。いにしえに山を治めた女神は美しい皮衣を纏っていたと言うから」

傍らで覚めるような瑠璃色の袍を纏って、中大兄が笑った。

「その、山の女神を崇めて花々が集ったというわけだ。獣が、そんなのように美しいものかね」

既に少し酔いのまわった中大兄は、周りもはばかりそんなことを大声で言って、間人を赤らめさせた。

「太皇太后様」

臣の一人が進み出て、梅の花を一枝、賜りたいと申し出た。

「構いませぬ、折りなさい。でも梅の枝をどうするの」

臣は微笑んただけで答えず、花をいっばいにつけた枝を折って持ち去った。しばらくして、中大兄と間人の前に酒瓶が運ばれて来た。

「御賞味下され」

傾けた口から、酒と共に梅の花が滑り出て盃に浮かんだ。満開の花が、花弁の柔らかな薄紅も、うてなやつややかな深紅色もそのままに白い濁酒に漉き込まれ、雪中に梅のほころぶ様を一椀の酒に封じたようだった。一口含むと梅花の凜とした香りが仄かに漂った。

「早春の風光をいただくようですね」

間人は喜んだ。中大兄もこの風雅な趣向を褒め、皆にふるまうよう命じた。花の酒に皆々が更に酔い、宴もたけなわになった時

「楽師」

間人は呼んだ。

「琴を弾きたい。その琴を貸しておくれ」

花枝を震わせた琴音に、人々は耳を覚まされた。振り向くと、花の下で膝に琴を抱えているのは間人であった。左手を糸に添え、右手に琴軋（こころ）を握って、間人はゆっくりと、琴をかき鳴らしていた。低く静かな、しかし水のように澄みきった音色が鳴り響いた。

張りつめた琴糸は固く、力をこめてはじくうち間人の体は疲れた。呼吸が乱れ、肩が少し上下した。中大兄は背後に寄った。体を抱き支え、左手で、間人に代わり琴の糸を押さえた。間人は振り返って、にこりと微笑んだ。中大兄の胸に体をあずけ、今一度琴軋を構えた。澄んだ琴音が散り、真珠玉のようにこぼれた。

間人が糸をかく。中大兄が糸を押さえる。また間人がかき鳴らす。中大兄が押さえる。風が立った。二人が奏でる琴は鮮やかな彩りを帯び深い陰影を伴ってこんこんと湧き、地の下をつたう下樋の水と

なつて、ゆるやかに荒れ野を渡った。

人々の間からつと、誰かが立ち上がった。白髯はくぜんを垂らした鎌足だった。二人に目礼すると、鎌足は奏でる琴に和して歌った。

枯野を 塩に焼き、其が余り 琴に作り、掻き弾くや 由良
の門の

門中の海石に 触れ立つ、なづの木の さやさや

応神帝おうじんの御世、枯野と名づけられた巨船があつた。長年使つうちに朽ちたため、薪にして塩を焼いたが、木の一本がどうしても焼けずに残った。そこで試しに焼け残った木で琴を作らせてみたところ、音は澄みきつて美しく、遠く七里にまで響いたという。鎌足が歌ったのは、その琴音の美しさを称えて応神帝が歌つたと伝えられる歌であつた。間人は鎌足の手を取り、甲をさすつて、その心に応えた。

「疲れてはおらぬか」

頬の色の少しさめたかに見える間人を、中大兄はいたわつた。間人は首を振り、しかしほつと息をついて、中大兄の肩に頭をもたせた。中大兄は肩を抱いて、皮衣の襟を直してやった。

「間人。わたしは、悔いはせぬ」

唇を寄せ、中大兄は力強い声で囁いた。たとえどのようなことであれ、この恋を中大兄が悔いてしまえば、身を傷つけ、汚すことも恐れず共に歩んでくれた間人の心は、その寄る辺を失つてしまう、如何なるさだめが待っているようにも、間人を愛したことは決して悔いるまいと、中大兄は心に誓つたのだった。

間人はその一言で、中大兄の心を察した。月明かりのような笑みを、間人は口元に浮かべた。白い花弁が舞い、慕うようにその黒髪へ散りかかった。

* * * *

それから数日のうちに、荒れ野の梅は皆散った。春の彩りは可憐な梅から、裳裾をなまめかしくほころばせる木蓮へと変わった。暖かな雨が続き、山野には金縷梅きんるばいが細い黄の色を一齐に揺らした。急に雪が戻ったかと眺めれば、それは雪柳の小さな花が白く枝を覆って咲いたのだった。そして花はまた移ろい、桜の薄紅が山の肌を一面に染め上げて、二月は、暮れようとしていた。

ある夜、中大兄は目を覚ました。宮は水底に沈んだように静まり返っていた。おもてにも何の物音もなかった。ただ夜の遙かな高みを、雁の鳴き音が一筋、渡った。

糸に引かれるように、中大兄は臥所から起き上がった。部屋を出て、闇が夜露を含んだ廊下を間人の部屋へと向かった。

胸元に白い手を置いて、間人は眠っていた。中大兄はかがみ込んだ。
だ。

「間人」

目が開いた。ふつと、唇が微笑んだ。

「今、雁の声が致しましたわ」

か細い声があった。

「北の地へ帰るのだよ。雁の声が聞けるのはもう今宵限りかもしれないな」

間人は頷いた。兄上、と間人は中大兄の方へ手を差し伸べた。

「起こして下さいませ。外が見とうございます」

夜具を取りのけ、中大兄は間人を抱き上げて窓辺へと運んだ。自分の足で立ちたいと言う間人を床にそつと下ろし、窓を開け放った。

この日空に月はなく、夜は暗かった。開け放ったものの、窓の外に見えるのはかろうじて、窓框のそばまで丈を伸ばした何かの草の穂と、宮を囲んで堀の向こうに茂る叢林のうつそうとした深い影ばかりだった。ただ時折、視界を白い飛沫が小さくかすめ飛ぶことがあった。風に吹きちぎれて来た、桜の花弁のようだった。

中大兄はせめて窓辺に明かりを運ぼうとしたが、間人はこのままで構わないと、こうべを振った。

「生まれてから今日まで、ずっと兄上と共に生きることが出来ましたわ。始めは、妹として。そしてのちには、妻として」

ぽつりと間人が言った。体を支えている中大兄の手をさぐり、そつと握った。

「幸せでございました」

「だがわたしは、もっと、長く共に生きたかった」

中大兄は低くつぶやいた。間人は答えなかった。闇の中に風の音がして、また白い花卉が舞って行った。花が闇に吞まれ、風音は絶えた。静けさが流れ込んで来た。それと共に、ひんやりとした夜気が這い上がって肌に触れた。枯れた花のにおいがした。

「兄上。皇位に就いて下さいませ」

冷え切った静寂の中間人は言った。

「もう、さまたげるものではありませんわ。帝となって下さい。即位の儀を行い、皇后をたて、何卒、名実共に、この国の王に……」

「承知した」

初めて、中大兄は間人の言葉にうべなった。

「そなたの殯^{もがり}が済みしだい、即位の儀を行う。わたしは帝となろう。だが、間人よ」

たった今口にした言葉とは裏腹に、間人を決して離すまいとでもするかのように、中大兄は抱いた両の腕に力をこめた。まなじりを上げじつと闇を見据えて言った。

「何処へ行こうとも忘れてくれるな。そなたこそは、血も、肉も、魂も、全てを分かち合った、この世でただ一人のわたしの片割れだ。我らの絆を世人は穢れと言った。だが、たとえ人が眉をひそめようと、神仏が咎めようと、我らが血を分けたあにいうとであるという事実を消すことは出来ぬ。絆を絶つことは出来ぬのだ。この中大兄、葛城皇子は、間人皇女でもある。そして間人皇女はまた、葛城皇子でもある。忘れてくれるな。こののち、二度とまみえるこ

と叶わぬ彼方に離れたとて、我々はとこしえに、一つだ」

いつしか中大兄の頬には冷たい涙が無心につたつた。間人は瞳を上げ、生涯かけて愛した兄の面輪を、ひたと仰いだ。

「兄上、今のお言葉、嬉しゅうございます」

力を振り絞るようにして、間人は両腕でしかと、中大兄の首を抱いた。二人の頬が触れた。間人の頬は熱く、中大兄の頬は冷たかった。

「兄上のお言葉、わたくし常世とこよに、胸に抱いて参りますわ」

耳元に間人の声がした。

空に雁が鳴いた。遠い鳴き音は暗いしじまを裂いて、夜の彼方へといつまでも長く余韻を引いた。

* * * *

間人皇女は、天智称制四年（六六五）二月二十五日に没した。まだ四十前という若さであった。盛大な喪の儀が薨去の翌月より執り行われ、中大兄は三百三十人を得度させ間人の追善とした。三百三十人もが一度に得度した例は他にない。それは太皇太后でも、皇太子の妹でもなく、まさに皇后のものと呼ぶにふさわしい殯であった。

二年後、殯を終え、小市岡上陵に間人と母帝を共に葬つたのち、中大兄は長く親しんだ飛鳥の地を離れ近江国大津へ遷都を行った。そしてその新しい大津の都で、中大兄は即位の儀にのぞんだ。

中大兄が病を得、床に伏すようになったのは、天智十年（六七二）

九月のことである。そしてその年の十二月三日、近江宮で中大兄は、
四十六年の波乱の生涯を閉じた。死後の諡号は天命開別尊。あめみことひらかすわけのみこと彼が皇
太子として政を執った年月は、乙巳の変より数えて実に二十三年の
長きに及ぶ。しかし帝の座にあったのは、その晩年のわずかに三年
の間のことであつた。

(了)

第四章 永訣（五）（後書き）

和琴を弾くためのバチ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9710m/>

あざみ野

2011年7月13日09時20分発行